In April 2022, Osaka City University and Osaka Prefecture University marge to Osaka Metropolitan University

Title	新宗教青年層における呪術性と共同性(中)：崇教真光を事例として
Author	谷，富夫
Citation	人文研究. 44 巻 10 号, p.731-770.
Issue Date	1992
ISSN	0491-3329
Type	Departmental Bulletin Paper
Textversion	Publisher
Publisher	大阪市立大学文学部
Description	

Placed on: Osaka City University Repository

Osaka Metropolitan University

人文研究　大阪市立大学文学部紀要
第44巻　第10分冊　1992年　1頁～40頁

新宗教青年層における呪術性と共同性(中)

—— 崇教真光を事例として ——

谷　富夫

目次　1．現代新宗教への視点
　　1）現代日本社会と新宗教
　　2）呪術性と共同性
　　3）現代新宗教と青年
　2．調査の対象と方法
　　1）真光青年隊
　　2）調査の概要
　3．青年信者のプロフィール
　　1）脱移動＝脱成長世代
　　2）連れられ型と煽られ型
　4．青年信者の生活構造
　　1）社会関係
　　2）異信関係
　　3）生活理念
　5．宗教的生きがいの構造－結びにかえて－

2．調査の対象と方法

1）真光青年隊

真光青年隊（以下「真光隊」と略）は、正式名称を「全国統一真光青年隊」という。「教団本然の使命遂行」のための「尖兵」となることを目標として〔真光青年隊統監部1983:1〕、初代教え主岡田光玉が、1971年3月28日に全国各地区青年隊の統一結成を宣し、同年11月7日の第12回秋期大祭を皮切りに

活動を開始した、真光教団の青少年信者下位組織である。

「教団本然の使命遂行」、すなわち崇教真光の公式目的とは、「神の経綸」を成就するための実践活動にある。主神は、地上に天国世界を建設するために人類など万物万象を生み出したが、人類は主神の神意を忘れて物質文明に陶酔し、己れの欲望を追求するあまり、自然を破壊し、自ら人類滅亡の危機を招くに到った。そこで神は、「大天変地異」＝「火の洗礼」を起こして欲深な人類を裁き、これを無事に乗り越えて生き残った者にのみ、次の新しい文明（「霊主文明」という）で生きる資格を与えようと企画したという。救済の条件は、「種人」となることである。「種人」とは、「真光の業」によって「霊・心・体」（の統一体として人間は存在すると信じられている）が浄まった人間のことであり、のみならず、一人でも多くの人間を救済すべく、広く社会に、（1）神の実在とその意図を知らしめ、（2）「真光の業」を施し、（3）「真光の業」によって霊が浄まれば心も体も浄まるという「正法」（「霊主心従体属の法則」ともいう）を流布する、その意味での「善化活動」を実践する人間のことである。そしてこの「善化活動」が、自己浄化の前提となる。

したがって、「尖兵」としての真光隊には、「種人」となるべく、「善化活動」を教団の先頭に立ってやり抜く使命がある。生前、岡田光玉は、真光隊に向けて「みなさんに心がけていただきたいのは、次の文明を創造する担い手は『自分たち青年である』という自覚と意気込みです。……次期文明の種人としての自己の完成を目指す。これこそ若い諸君の、ほんとうの人生の第一歩的目標ではなかろうか」とよびかけている［岡田1983：82－83］。しかし、このような「善化活動」には、世間知で考えて、当然多大の困難が伴うはずである。

光玉は青年信者に対して多くの教示を残しているが［岡田1983］、その中で繰り返し説いている教えに、「ス直がコツなり」［岡田1983：13］と、「若いうちに叩かれよ」［岡田1983：170］の二つがある。「ス直」とは、「ス＝主」の教えである「正法」に直くあれ、との意味づけで、どこまでも神意に忠実であれと説諭しているのである。また、「若いうちに叩かれよ」は、光玉の人生観であるという［岡田1983：170］。「艱難汝を玉にす」も、しばしば引用されていて、光玉の好きな言葉であるようだ。「何でもいいから『鍛えてもらおう』『人のイヤガルことを率先し自分の身に引き受けてやろう』という式のど根性をもつ。そういう意味で叩かれろというのです」［岡田1983：

72]。「困難に直面すればするほど、ますます奮い立っていく大勇、それが自分を鍛える一番よい方法です」とも語っている［岡田1983：74］。確かに、「神の経綸」に「ス直」であれば、当然世間からは「叩かれる」。つまり、このカリスマは、真光隊の直面する社会的宿命をそのまま教示していたわけである。その意味では、次にあげる青年隊の各種活動とイニシエーション・プログラムは、そうした宿命に打ち勝つためのトレーニングと見ることができよう。

「真光青年隊隊規」第92・93条によれば、真光隊の活動内容は、大きく「修錬」と「活動」とにわかれている。このうち「修錬」は、「教育行為」と「訓練行為」とからなる。「教育行為」とは、「正法」の教説を学び、「真光の業」を修じる知育で、具体的には「み教え勉強会」「お浄め実修会」などがある。「訓練行為」とは、「部隊教練」のことで、いわば体育。行進、停止、整列、駆け足などの集合訓練を公園などでやっており、パレードなどでその成果が発揮される。一方の「活動」には、個人が行なう「お導き奉仕」（入信の勧誘）と、部隊の集団活動である「布教運動」および「奉仕運動」がある。「布教」の具体的活動は、パネル展、教団刊行物の配布、戸別訪問、辻説法、市中パレードなどがある。「奉仕」は、各種教団行事の世話や道場清掃などである。これらによって、隊員の人格完成と部隊強化（「修錬」において）、および「教団本然の使命遂行」（「活動」において）が目指されている。

「隊規」第95条にはまた、修錬・活動が「衆人環視の内に行われるのが常であることを忘れてはならない」として、「頭髪や服装を端正に保ち、言語動作をつつしみ深く、正しい規律をもって親切のまことを尽し、奥ゆかしく上品であって、しかも動じない撥剌たる意気を表す態度に一貫することを先決条件とする」と、隊員のあるべき生活態度が規定されている。確かに、筆者が出会った真光隊員は、ほぼ例外なくこのような態度の持ち主であった。このように、「修錬・活動」が道徳形成の面で社会教育的役割を果たしていることは間違いないし、それはそれで評価に値することと思う。

ところで、これだけの活動をこなし、人間形成を目指そうとするならば、光玉もいうように、相当の「自覚と意気込み」が要求されよう。それ故、入隊を希望するものは、まず「準隊員」として一定の教育期間をすごし、その間に幾つものハードルをクリアしないことには、「正隊員」になることはできない。すなわち、勉強会、教錬、筆記・面接試験等の教育カリキュラム、

および、1名のリクルート達成（「お導き」）と初級研修再聴講の実績を積んで、初めて入隊が許可されるのである。「入隊志願者のうち正隊員になれるものは半数に満たない」[15]とも、「真光隊員は青年信者の3～4割にすぎない」[16]ともいわれている。

こうした試練をへた真光隊員が、全国に1万数千人いる。彼らは、いわば選りすぐりの教団エリートということができる。つまり真光隊は、崇教真光青年信者層の理念型に近い存在なのであり、したがって、彼らを通して、教団が青年たちを導こうとしている方向性を見定めることができると推察される。これをより一般化して述べれば、呪術的新宗教は若者をどこへ連れて行こうとしているのか、そのモデル・ケースとして真光隊を扱おうということである。それによって、ブームからみた新宗教と内部から見た新宗教の、それぞれの若者像を比較検討することも可能となるであろう。

最後に隊組織に触れておけば、真光隊は年齢別に成人部隊（社会人）、青年部隊（高大生）、少年部隊（10歳以上の小中生）に分かれている。準隊員教育は、高校1年生（相当年齢）以上の志願者に限り課せられるもので、したがって、青年部隊と成人部隊が真光隊の実働部隊ということになる。除隊年齢は、男女とも35歳。ただし、役職者は40歳まで、また、女子は35歳以前でも結婚すれば辞めなくてはならない。

真光隊は、道場（正式名称は、魂霊修験（たまひしゅうげん）道場）を単位に、道場長の指導下に組織されている（隊規第36条）。崇教真光の全体組織は、調査時の1987年時点では、全国21ブロックの「方面指導部」が傘下の道場を統括しており、これに対応して真光隊も、21の「方面隊」の下に「道場隊」が位置づけられていた[17]。崇教真光の道場は信者たちの日常的な活動拠点である。道場を「ムラ」に喩えれば、道場隊はその若者組にあたるわけである。道場隊はさらに下方へ、性別、年齢別に分岐し、それぞれが中隊・小隊・分隊へと細分され、上位組織が下位組織を系統下におくという形でヒエラルキー構造を形成している。分隊は、教団全体の最末端組織である「班」レベルに相当する。どのレベルにも、正・副隊長がいて、彼らが隊を統率している（図1参照）。

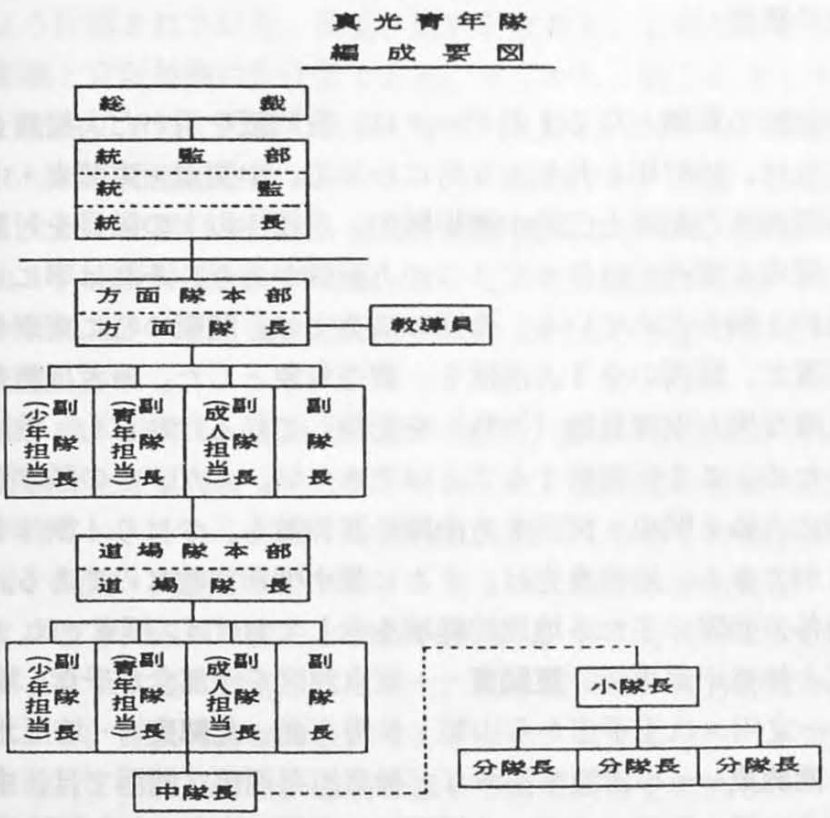

図1(a)　真光隊組織図(1)

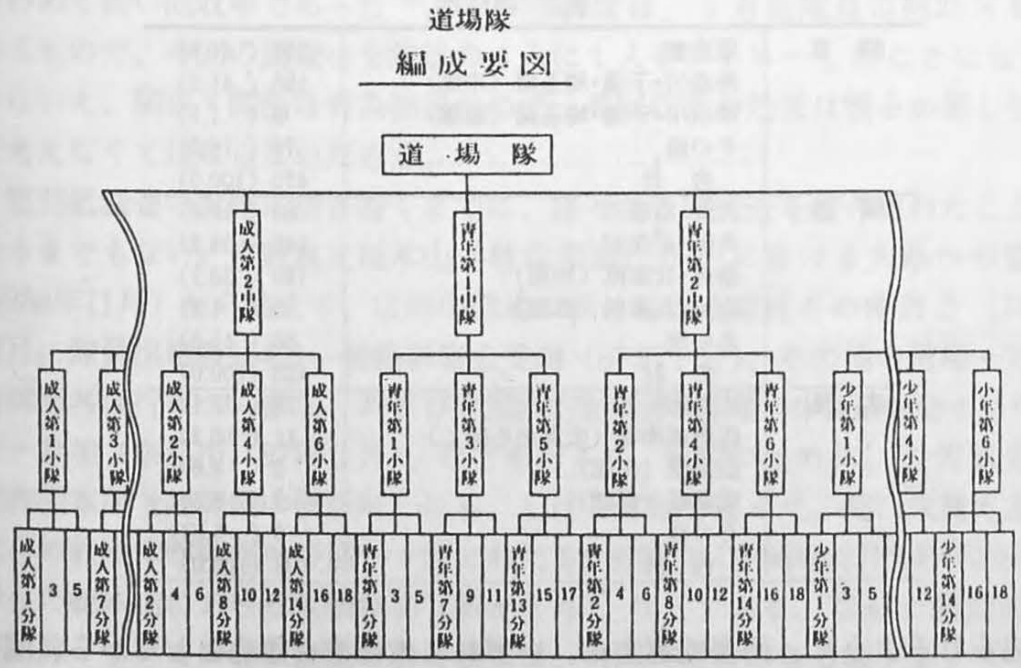

図1(b)　真光隊組織図(2)

2）調査の概要

本稿の立論の基礎となる主要データは、質問紙を用いた大量調査から得ている。これは、1987年5月から6月にかけて、中関東・東関東・中関西・北関西・西関西各方面隊と広島中道場隊の、高校生以上の隊員を対象にして実施した。関東と関西には併せて8つの方面隊があり、それは率にして全国21方面隊の約4割を占めている。今回の調査では、関東の特に東京を中心とする2方面隊と、関西の全3方面隊を、調査対象とした。筆者は調査対象5方面隊の正確な男女別隊員数（当時）を把握しているけれども、教団の秘密事項であるため、ここに報告することはできない。ただ、その数字から推計して、全国に占める関東・関西8方面隊の隊員数も、やはり4割は下らないと見ることができる。崇教真光は、まさに都市型新宗教なのである。なお、関東・関西各方面隊の主たる地理的範域を示しておけば、関東では、**中関東**——東京23区と神奈川県東部、**東関東**——東京23区を一部含む千葉・埼玉・茨城、**西関東**——立川・八王子市から山梨・長野方面、**北関東**——埼玉北部から群馬方面、**南関東**——小田原・沼津など神奈川県西部。関西では、**中関西**——大阪を中心に堺・和歌山方面、**北関西**——京都・枚方・奈良方面、**西関西**——兵庫県、となっている。

表2　現住地

関　東	東京都	191（ 40.6）
	神奈川・千葉・埼玉県（市部）	195（ 41.5）
	神奈川・千葉・埼玉県（郡部）	8（ 1.7）
	その他	76（ 16.2）
	合　計	470（100.0）
関　西	大阪・京都市	83（ 19.6）
	大阪・京都府	145（ 34.3）
	奈良・兵庫県（市部）	140（ 33.1）
	奈良・兵庫県（郡部）	5（ 1.2）
	その他	50（ 11.8）
	合　計	423（100.0）
広　島	広島市	79（ 73.1）
	広島都市圏（広島市を除く）	11（ 10.2）
	広島県（市部）	5（ 4.6）
	広島県（郡部）	7（ 6.5）
	その他	6（ 5.6）
	合　計	108（100.0）

見られるように、調査地選定は、いずれも大都市を中心としながら、関東は首都中心型となるよう、また、関西は、京阪神の周辺地域も含む関西一円

型となるよう計画されている。実際、調査対象者も、8割ないし9割が、それぞれ首都圏と京阪神圏の在住者である。すなわち、表2に示したように、関東では、都内40.6%、千葉・埼玉・神奈川3県43.2%（内、郡部1.7%）、併せて83.8%が首都圏居住者であり、一方の関西でも、大阪・京都市19.6%、両市を除く大阪・京都府34.3%、奈良・兵庫県34.3%（内、郡部1.2%）、これら88.2%が、京阪神圏居住者であった。こうした首都中心型－関西一円型の地域的対照性は、当然、調査結果にも反映されると予想できる（広島も、都市圏中心型）。

それから、標本規模は、関東2方面が各250、関西3方面隊が各150、および広島中道場は全隊員110、計1,060と計画した。質問票の原稿作成と標本計画は筆者が行ない、それらに対する崇教真光教え主をはじめ教団本部の承諾を得た上で、関東・関西については、5月8日に教団本部広報部へ質問票の印刷、および各方面隊への配布と回収を依頼し、翌6月10日に全記入済み調査票が本部より筆者宛に郵送されて来た。標本選択は、各方面隊での有為抽出となっている。隊員名簿が非公開であるため、無作為抽出は不可能であった。これに並行して広島でも、道場を通して留置調査を実施した[18]。

回収結果は、関東2方面隊の有効票が計470票（回収率94.0%）、関西3方面隊が計423票（94.0%）、広島108票（98.2%）の合計1,001票（94.4%）で、きわめて高い回収率であった[19]。この回収数は、5方面隊員の約25%を占めるもので、今回の調査は全隊員の4人に1人をフォローしたことになる。とはいえ、関東・関西は有為抽出なので、高回収率の効果は幾らか差し引いて考えなくてはならないだろう。

質問紙調査の実施に漕ぎ着くまでに、様々な予備調査を積み重ねたことはいうまでもない。崇教真光総本山（岐阜県高山市）における大祭への参加（1986年11月）から始まり、広島中道場における真光隊員との座談会（同年12月。隊員出席者15名）、初級研修会受講（87年1月）、その他の道場・方面指導部各種行事への参加、および北関西方面指導部主催の中級研修会オブザーバー参加（奈良市。87年3月）、などを行った。比較のために、世界真光文明教団本部（静岡県中伊豆町）にも、しばしば足を運んだ。関口栄教え主をはじめ教団本部幹部への延べ4回にわたる面接調査（1988年12月～89年10月）、伊豆の総本山における大祭参加（89年8月）、などである。なお、質問紙調査を除くすべての聴取調査と参与観察は、共同研究者である畑中幸子（中部大学教授）、中林伸浩（金沢大学教授）、クネヒト・ペトロ（南山大学助教授）、

岡田浩樹（総合研究大学院大学博士課程）とともに行った。

3．青年信者のプロフィール

1）脱移動＝脱成長世代

まず調査対象者の社会的属性に目を通して、信者青年像の輪郭を描くことから始めたい。表3の一覧表が、それである。性別では、関東（首都圏）・関西（京阪神圏）ともにだいたい男女半々の割合でデータを取ることができた。母集団全体の男女比は、関東2ブロックが48.8対51.2、関西3ブロックが46.1対53.9なので、現実の姿をほぼ写した構成比となっている。広島は、女性が72.2%と、性比が大きく女性に傾いているが、広島は悉皆調査なので、これは広島の一つの地域的信者特性ということになる。

年齢構成は、関東・関西いずれも、20代前半の層が最も多く、30代に入ると激減するという共通した傾向がみられた。真光隊が、独身社会人と大学生を主力とするグループであることを示している。ただ、関東では、20代前半から同後半にかけての20代層が主軸である（併せて69.8%）のに対して、関西では、20代前半から10代後半の、より若い層が多い（同70.0%）。広島のパターンはまた異なり、全体にやや若い層へ傾斜しながらも、10代後半層から20代後半層までの5歳刻みの3層に、25～30%程度でほぼ均等に分散している。要するに、関東はより多くの社会人を含み、関西はより多くの高校生を含んでいるとみられる（広島は、その両要素が混在）わけで、つぎにこのことを学歴によって確認していこう。

在学生と学卒者の対比は、関東がおよそ2対8、関西・広島は3.5対6.5となっていて、全体に上記の年齢構成がそのまま反映されている。関東の方が学卒者が比較的多い。大卒は、関東が率にして関西より約2倍多く（21.5%と12.1%）、逆に、高校生は、関西の方が関東より3倍も多い（14.9%と5.5%）。このような地域差は、それぞれの社会的地域特性とどのように関連しているのだろうか。また、親の脛かじりである高校生と一人前の社会人では、生活構造が当然異なるであろうから、そのことが信仰生活にどのような違いとなって現れ、全体としてどのような宗教的地域特性を形作っていくものであろうか。分析上の一視点となる。それにしても、全体に非常に学歴が高いことは、強調されてよいと思う。約3割いる高卒者よりも、短大・大卒

表3　青年信者の基本属性

		関　東	関　西	広　島
性別	男	243(51.7)	189(44.7)	29(26.9)
	女	223(47.4)	232(54.8)	78(72.2)
	不　明	4(0.9)	2(0.5)	1(0.9)
年齢	16～19歳	69(14.7)	123(29.1)	33(30.6)
	20～24	175(37.2)	173(40.9)	30(27.8)
	25～29	153(32.6)	80(18.9)	28(25.9)
	30～34	48(10.2)	25(5.9)	8(7.4)
	35～40	15(3.2)	7(1.7)	6(5.6)
	不　明	10(2.1)	15(3.5)	3(2.7)
学歴	在学生	93(20.5)	144(35.9)	36(34.6)
	学卒者	361(79.5)	257(64.1)	68(65.4)
	高校在学	26(5.5)	63(14.9)	19(17.6)
	高校卒業	154(32.8)	110(26.0)	22(20.4)
	短大在学	27(5.7)	34(8.0)	12(11.1)
	短大卒業	106(22.6)	96(22.7)	25(23.1)
	大学在学	40(8.5)	47(11.1)	5(4.6)
	大学卒業	101(21.5)	51(12.1)	21(19.4)
	不　明	16(3.4)	22(5.2)	4(3.8)
職種	農林業	1(0.2)	1(0.2)	0(0.0)
	商工等自営業	22(4.7)	15(3.5)	0(0.0)
	管理・専門技術	92(19.6)	47(11.1)	15(13.9)
	事　務	129(27.4)	100(23.6)	26(24.1)
	販売・サービス	54(11.5)	33(7.8)	7(6.5)
	労　務	46(9.8)	29(6.9)	10(9.3)
	家族従業者	7(1.5)	10(2.4)	3(2.8)
	学　生	93(19.8)	144(34.0)	36(33.3)
	その他（無職含む）	14(3.0)	22(5.2)	9(8.3)
	不　明	12(2.5)	22(5.3)	2(1.8)
職業規模	官公庁	37(7.9)	22(5.2)	7(6.5)
	民間(1,000人以上)	78(16.6)	43(10.2)	15(13.9)
	民間(300～999)	39(8.3)	23(5.4)	8(7.4)
	民間(30～299)	78(16.6)	64(15.1)	17(15.7)
	民間(5～29)	73(15.5)	60(14.2)	6(5.6)
	民間(4以下)	18(3.8)	14(3.3)	2(1.9)
	家族経営	16(3.4)	11(2.6)	2(1.9)
	その他	10(2.1)	7(1.7)	6(5.6)
	不　明	16(3.4)	11(2.6)	2(1.8)
	非該当（学生含む）	105(22.4)	168(39.7)	43(39.7)
収入	10万未満	46(12.3)	58(21.2)	21(31.8)
	10～20万未満	232(62.2)	168(61.5)	37(56.1)
	20～30万未満	68(18.2)	30(11.0)	5(7.6)
	30～50万未満	16(4.3)	4(1.5)	2(3.0)
	50万以上	3(0.8)	0(0.0)	0(0.0)
	不　明	8(2.2)	13(4.8)	1(1.5)
	非該当	97	150	42
結婚	未　婚	417(88.7)	387(91.5)	90(83.3)
	既婚・子なし	18(3.8)	16(3.8)	2(1.9)
	既婚・子あり	30(6.4)	17(4.0)	14(13.0)
	その他・不明	5(1.1)	3(0.7)	2(1.8)
家族形態	単独世帯	120(25.5)	48(11.3)	11(10.2)
	核家族	273(58.1)	306(72.3)	75(69.4)
	3世代同居	59(12.6)	49(11.6)	20(18.5)
	その他	8(1.7)	6(1.4)	2(1.9)
	不　明	10(2.1)	14(3.4)	0(0.0)
	合　計	470(100.0)	423(100.0)	108(100.0)

者の方がはるかに多い（在学生も含めて５割以上）。しかも、首都圏でこの傾向がより顕著である。高い進学率は、都市性の一つであり、かつ、真光隊がエリート集団であることの一要素でもある。

つぎに職業と収入をみてみると、まず現職では、どの地点も、学生を別にすれば、事務職が25％前後で最も多く、次いで管理・専門技術職（15％前後）、３位販売サービス業（10％前後）、４位労務職（10％弱）、の順である（広島のみ、３、４位逆転）。高学歴を反映した職業構成になっている。とくに関東で事務職と専技職の比率が高く、関西は低い、広島はその中間、という関係になっている。関東の、管理・専門技術職の割合が他地点よりも高い（19.6％）点が、とりわけ目を引く。これも、首都圏の一つの特性といえよう。いずれにせよ、真光隊がホワイト・カラーとその予備軍（大学生）を中心としていることは、以上によって明らかであろう。事業体規模も、こうした地域的差異を反映して、関東が官公庁・民間大企業（「民間1,000以上」）に就職している割合が比較的高く、関西は中小企業（「民間５～299」）がやや多い。広島はその中間である。表掲載は省くが、専技・事務職を規模別にみると、官公庁・大企業と中小企業の割合は、関東が41.2％と43.1％であるのに対して、関西は34.5％と51.7％で、中小企業の方へかなり傾斜している。収入階層も、これを反映して、関東がやや高く、関西は低い。広島はさらに低いようだが、広島の低収入層の大部分が親と同居している独身女性であることが分かっているので、むしろ、後でみる家族の比較的高い階層的地位によって生活や意識は規定されていると見るべきであろう。

その「家族」に目を転じれば、言うまでもなく圧倒的に未婚が多い。しかし、家族形態は、大半が核家族である中で、若干の地域差も見られた。関東では単独世帯が25.5％もあり、他に比較してかなり多い（関西11.3％、広島10.2％）。これは、先にみた年齢構成と関連しているし、また、中央大都市圏の流動性（「独身者主義」）とも関連していよう。逆に、広島では３世代同居家族が18.5％で最も多く、これも、地方の土着性を反映していて面白い。

こうしてみると、調査対象者のプロフィールは実感的にも無理のない姿をしていて、当初懸念されたサンプリング上の有為バイアスも、そう大きくないのではなかろうかと楽観視したい次第であるが、それはさておき、以上のアウトラインを踏まえて次に指摘したいことは、社会移動の観点から見た彼らの世代的特性である。

その第１は、青年信者の地域的な非流動性ということ。関東・関西の場合、

調査対象者の8割以上9割近くが、それぞれ首都圏と京阪神圏に在住していることはすでに触れたが、図2のように、彼らの生まれ（出生地）も、育ち（10代居住地）も、大部分がやはり「首都圏」（左図の①②であり、「京阪神圏」（右図の①②③）なのである。現住地と出生地をクロス集計してみたところ、首都圏在住者の62.9%、京阪神圏在住者に至っては77.7%が、それぞれの都市圏で出生していることが分かった（表は略）。比較で言えば、さすがに首都圏はより流動的であり、京阪神圏はより定着的である。先にみた、首都圏の高学歴や単身居住者の多さなどは、この流動性と関連していよう。しかし全体に、東京・大阪という巨大都市のイメージからはほど遠い、非常に高い定住率なのである。

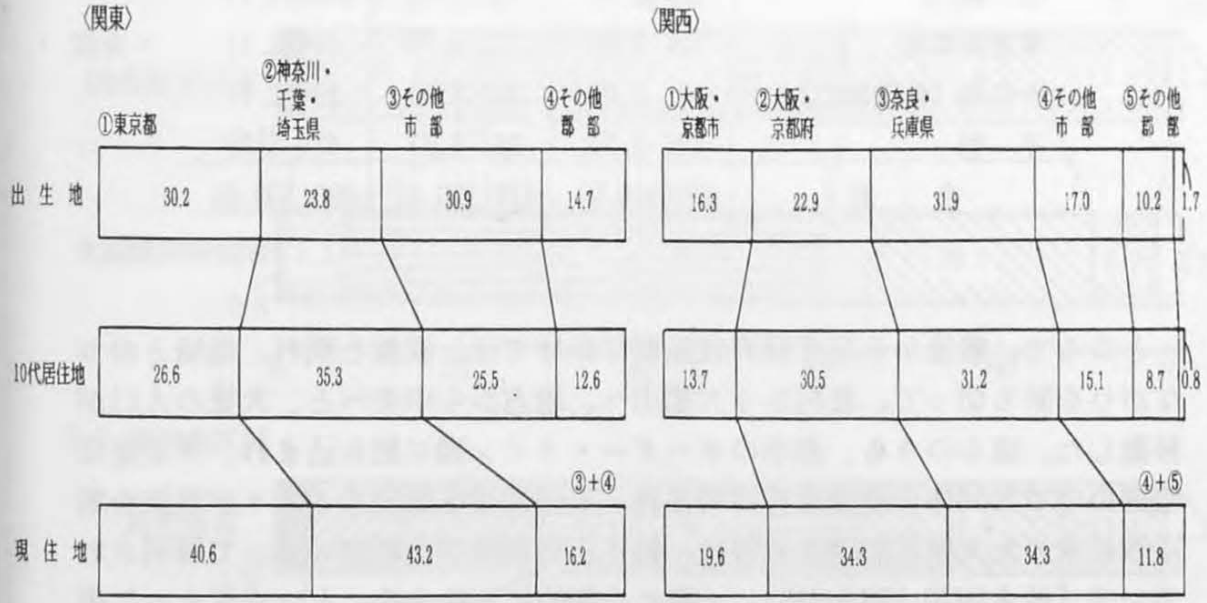

図2　地域移動

第2は、世代間の職業移動について。青年信者が専門技術職を含むホワイトカラーとその予備軍を中心とすることはすでに述べたが、父親の職業構成も、関東・関西の場合、表4のように、全体に管理・専門職（30.0%）と自営業主（24.3%）が、1、2位となっている。しかも、管理・専門職ではその過半数（53.8%）が官公庁および大企業に勤務している（表は略）。これら二つの職種は、新中間層と旧中間層とがそれぞれに昇る職業階梯上の一定

の到達点とみることができるから、青年信者の親たちの多くは一応の職業的成功を遂げており、したがって、青年信者に特徴的な高学歴と専門職志向は、彼らが階層的に比較的高いラインから職業移動を開始している結果とみることができよう。

表4　父親の職業

職　種	関　東	関　西	合　計
農林業	31(6.6)	18(4.3)	49(5.5)
商工等自営業	135(28.7)	82(19.4)	217(24.3)
管理・専門技術	132(28.1)	136(32.2)	268(30.0)
事　務	46(9.8)	47(11.1)	93(10.4)
販売・サービス	23(4.9)	18(4.3)	41(4.6)
労　務	68(14.5)	72(17.0)	140(15.7)
家族従業者	12(2.6)	7(1.7)	19(2.1)
その他（無職含む）	9(1.9)	10(2.3)	19(2.1)
不　明	14(2.9)	33(7.7)	47(5.3)
合　計	470(100.0)	423(100.0)	893(100.0)

ところで、戦後から高度経済成長期にかけては、家族と別れ、地域とのつながりを断ち切って、農村から大都市へ、地方から中央へと、大量の人口が移動した。彼らのうち、都市のボーダー・ライン層に組み込まれ、不安定な境遇の中で共同体の崩壊感覚に苛まれ、その回復を願望する人々が救済を新宗教に求めた大衆思想運動過程は、鈴木広の創価学会研究によって解明されている［鈴木1970:259－336］。一般に心理的にも社会的にもマージナルな世代である青年が、当時の都市で新宗教に救いを求めた問題状況も、一つはここにあったといってよい。

それに比べて、現在の青年信者の様変わりにはたいへんなものがある。第1に、離村向都型の地域移動とは殆ど無縁であるし、第2に、ボーダー・ライン層どころか、中・上層ラインから人生航路へ踏み出そうとしているわけである。彼らの親たちは、昭和ヒトケタ前後の世代とみられるから、地域的・職業的に激動の時代をくぐり抜けて、今ようやく安定を克ち得た人々と想定される。したがって、彼ら青年たちは、そんな親のもとで生まれ、育った、「脱移動＝脱成長世代」ということができる。70年代後半以降の呪術的新宗

教がまさしく高度成長後の新宗教であるということの、これが一つの実体である。

なお、以上のような客観的な存在形態が意識面に反映された姿を確認するために、階層帰属意識と政党支持のデータを示しておきたい。まず、関東・関西の階層帰属意識は、図3（a）の通りである。コントロール・グループとしては必ずしも適切とはいえないかもしれないが、「総理府国民生活調査」を援用してみると、青年信者の階層意識は、やはり相対的に高いといえる。

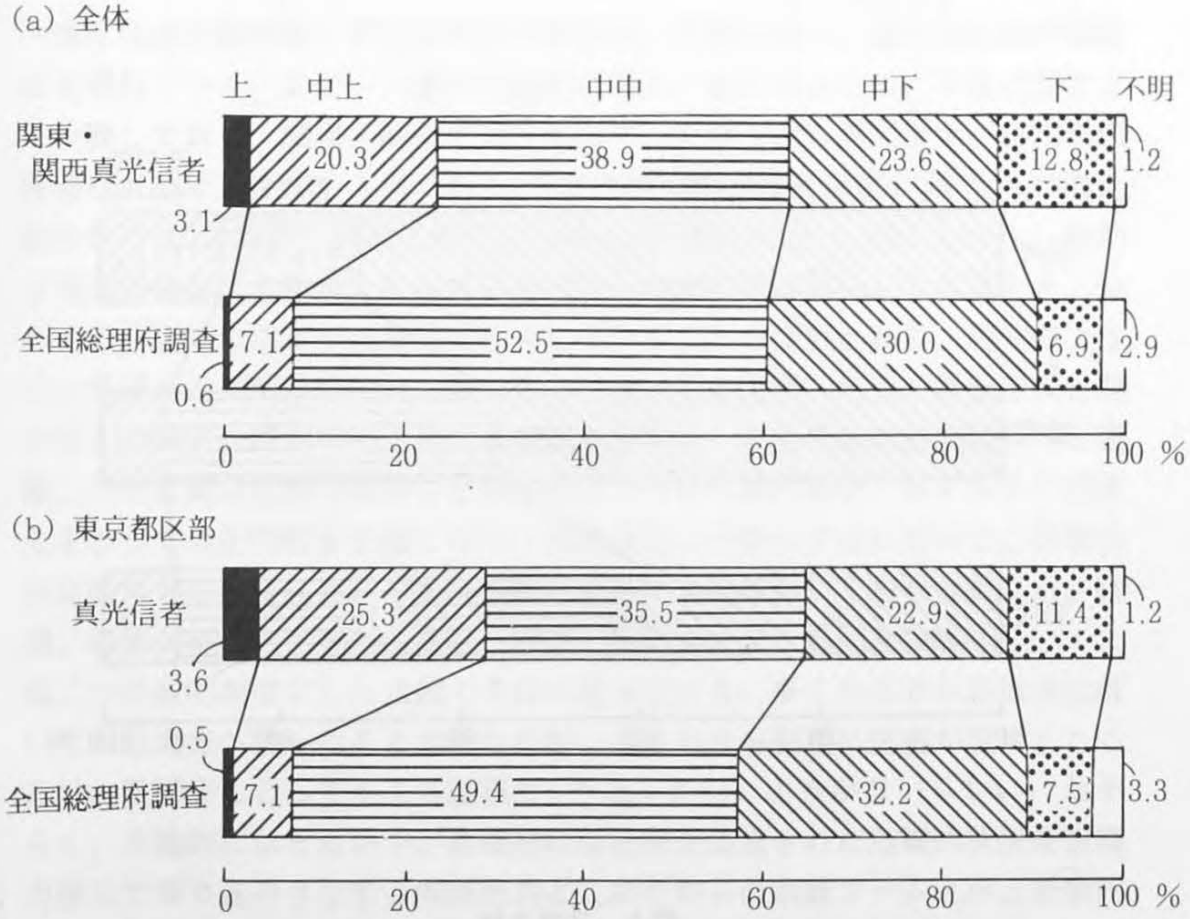

図3　階層帰属意識

(注)「全国総理府調査」は、1987年5～6月に実施された総理府国民生活調査結果を引用［総理府広報室 1987：3－4］。

「下」も比率にして倍近く多いけれど、それ以上に「上」と「中の上」が顕著に多い。前者の「下」については年齢の低さに規定される対象者本人の所得の低さが、また、後者については右で示した定位家族の階層性の高さなどが、それぞれ作用しているものとみられる。また、都市規模条件をコントロールし、「東京都区部」のみを切り出して比較したところ、青年信者の中・上位性が一層顕著に表われた。図3（b）のように、「上」「中の上」部分で総理府調査との開きがさらに大きくなっている。なお、年齢をコントロールして「20〜24歳層」で今回調査と総理府調査を比較したこともあるが、それによっても、男性を中心に青年信者の方が比較的階層性が高いことが明らかになっている［谷1987：109］。

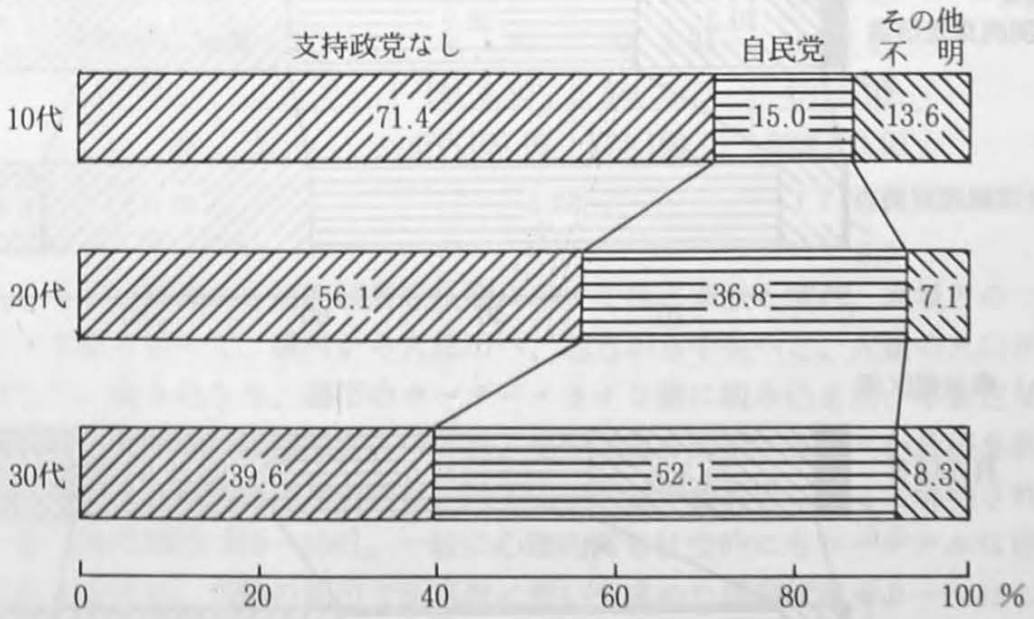

図4　政党支持
（注）関東．関西のみ。

若い本人の低所得は、経営組織の年功序列的雇用慣行を前提に考えれば、時間がある程度解決する公算が大きいので、以上のすべてのデータから、崇教真光の青年信者は、現代の「経済大国日本」の安定層に、客観的にも主観

的にも組み込まれている、ごく標準的な日本人と結論づけることができそうである。このことを反映して、政治意識も、無関心か、さもなければ「保守」的方向で組織されている。ただし、図4のような、政治的に「無」なる10代「支持政党なし」が、加齢とともに急速かつ大量に「自民党」支持という保守的態度を鮮明にしていくパターンからは、むしろ、教団が若者を導いて行こうとしている体制サイドの志向性をこそ読み取るべきであろう（第4節第3項を参照)。

2）連れられ型と煽られ型

青年信者の脱移動＝脱成長的世代特性は、当然ながら、彼らの宗教的側面にも現れている。まず、入信の時期的分布は、表5のように、3地点間でほぼ一致しており、関東・関西では7割以上、広島では8割以上が、1978年以降現在（87年）までの入信である。「崇教真光で、若者信者が目立って増え始めたのは、(昭和）55年ごろだ」［神奈川新聞社1986：209］という一般的な見方を裏付ける結果となっている。とくに教団史に照らしてみるとき、いわゆる分裂期に信者が飛躍的に増大していることが注目される。周知のように、世界真光文明教団では、1974年、岡田光玉の死後、光玉の養女恵珠（けいしゅ）と関口栄との間で後継者をめぐるお家騒動が起こる。この内紛は裁判闘争へと発展、77年に東京地裁で敗訴した恵珠派は、78年に教団離脱、みずから2代教え主としての正当性を主張しつつ「崇教真光」を設立するに至って、分裂は決定的なものとなった。分裂後も舞台を東京高裁に移して裁判は続くが、結局、82年に高裁で和解が成立し、以後、世界真光文明教団と崇教真光という、瓜二つの教団が並立した状態で今日に至っている。多くの信者が恵珠派に就いて崇教真光へ移ったことは確かだが、とりわけ分裂期に信者が急増したことは、教団側にとっても「不思議だ」[20]としかいいようがないらしい。おそらく、主観的にはともかく、客観的には正系を追放された危機的状況を組織力強化で乗りきろうとする内部圧力と、おりからの宗教ブームとが、相乗的に作用した結果ではないかとみられる。後にあげる入信過程に関するいくつかのデータが、そうした分析を可能にするのだが、それを見る前に青年信者の入信年齢に触れておきたい。

真光教団への加入は、3日間の「初級研修」を受講し、その最終日に「御み霊」を授かって「入信」となる。初級研修は10歳以上の者にのみ受講が認

表5　入信時期

	1973年以前	1974－77年（内紛期）	1978－82年（分裂期）	1983－87年（並立期）	不　明	合　計
関東	20(4.3)	83(17.7)	190(40.4)	173(36.8)	4(0.9)	470(100.0)
関西	16(3.8)	78(18.4)	189(44.7)	138(32.6)	2(0.5)	423(100.0)
広島	2(1.9)	13(12.0)	58(53.7)	35(32.4)	0	108(100.0)

められているから、10歳未満での入信は真光教団の場合ありえない。図5は、入信年齢層を学歴対応で区分したものだが、これによると、首都圏では、19～22歳の大学相当層の入信が29.6%で最も多く、ついで16～18歳の高校生層（24.0%）が多い。一方、京阪神圏では、10～12歳の小学生層が29.1%で最も多く、ついで中学生層（13～15歳）と高校生層が同率（22.0%）で多い。23歳以上の社会人層の割合は全体にそう多いとはいえず、したがって、以上の傾向をやや図式的にまとめれば、首都圏では大学生を中心とする青年層の入信が、京阪神圏では小中学齢期を中心とする少年層の入信が、それぞれ隣接する高校生層を巻き込んで主流を形成している、ということになる。なお、「19～22歳の大学相当層」に占める大学生の実際の割合は、関東・関西で65.6%、広島では78.9%に上っており（表は略）、「大学生を中心とする」という表現には妥当性があることを強調しておきたい。ともあれ、両圏はきわめて対照的な姿を示している（広島はその中間）。この地域的対照性を、少年層と青年層の世代的対照性に置き直して、現象の規定要因を探っていきたい。

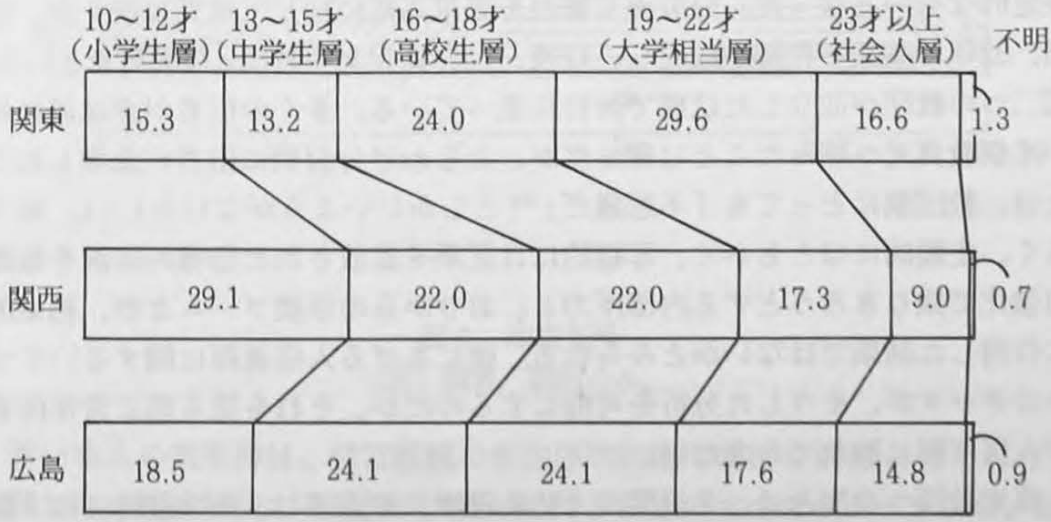

図5　入信年齢

入信の動機を、まずいくつでもあげてもらったところ、図6のような斜線棒グラフの結果を得た（関東・関西統合データを使用)。霊界志向（選択肢は、「霊魂の実在や超常現象に関心があって」）が、45.7%でトップ。2人に1人があげている。ついで病気37.0%、「特に理由はなかった」29.6%、の順である。次に、複数あげた動機の中から「もっとも大きな動機」を答えてもらった結果が、黒い棒グラフである。やはり1位は霊界志向の23.9%ではあるものの、複数回答の際の45.7%と比べれば激減しているといってよく、このことから、青年信者が抱く諸動機の中に占めるそのウェイトは、言われているほどには大きくないのではないかと、評価できる（グラフ右端カッコ内のウェイト値を参照)。なぜならば、「理由無し」と「病気」も、これとほぼ同率であり、しかも、これらのウェイト値＝歩留りは霊界志向よりも大きい。従来、霊界志向のみが過剰に強調されすぎたきらいのあることを、ここで改めて指摘しておきたい。一方、旧来型の新宗教では筆頭動機にあげられてきた「貧」は0.3%と皆無に等しく、また、「争」を内包する「家族問題」も、7.1%で非常に少ない。対象者が「若い」という事情もあるけれども、昔日の面影はほとんど見られない。現代の新宗教は、少なくとも若年層に関する限り、「貧病争」ならぬ「霊・無・病」の新宗教なのである[21]。しかも、「霊」は青年層と、「無」は少年層と、それぞれ親和関係にあるのだが、このことの検証に入る前に、ここで入信動機に関する自由回答を事例研究風に紹介しておきたい。

この自由回答は、筆者の意図としては、「その他」の項にマルを付けた人に具体的に動機を記述してもらうことを狙ったものだが、回答者は、そうした枠に捕らわれず、「霊無病」も含めてかなり自由に、また多彩な表現で書いてくれている。したがって、それらの回答を分類することによって動機の全貌をほぼ完全につかむことができると考えられるのである。なお、ここで示す年齢は入信当時のものである。

〔A〕最も多かった記述はやはり霊界志向に関するもの。彼らの多くがマスコミのブームに煽られて霊界に興味を抱いていることを、とくに最後の2例が如実に物語っている。「黒田みのる」とは、「神霊漫画」の草分人気作家で、新宗教も創始している（らしい)。

「ハンド・パワーが簡単にできる」(男・18歳)

「超能力に興味があった」(女・10歳)

「手かざしをしたかった」(女・17歳)

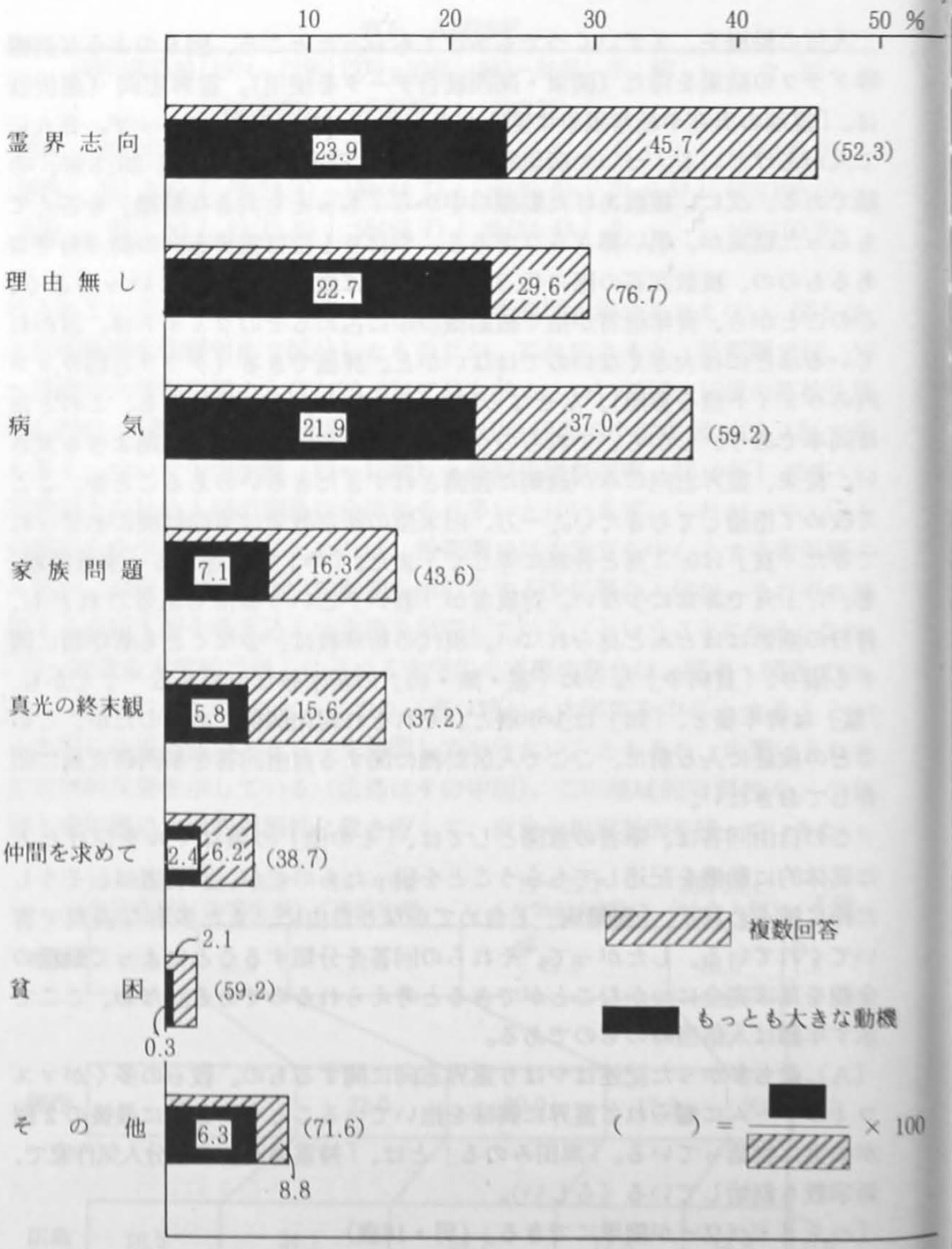
10
20
30
40
50 %
霊界志向
23.9
45.7
(52.3)
理由無し
22.7
29.6
(76.7)
病気
21.9
37.0
(59.2)
家族問題
7.1
16.3
(43.6)
真光の終末観
5.8
15.6
(37.2)
仲間を求めて
2.4
6.2
(38.7)
貧困
2.1
0.3
(59.2)
その他
6.3
8.8
(71.6)
複数回答
もっとも大きな動機
( ) = × 100

図6　入信動機（関東・関西）

「手かざしをしただけで人が救えるならすばらしいと思った」(男・21歳)
「おみたまがほしかったから」(女・15歳)
「自分が死んでどこに行くのか知りたかった」(女・17歳)
「霊が見えた」(男・17歳)
「霊動が出て、興味を持ったから」(男・19歳)
「霊動を体験したから、神様の実在を体感した」(女・20歳)
「母の病気回復を目のあたりに見て。自分自身も霊動があって」(女・12歳)
「腹痛の時、お浄めをいただいてすぐよくなり、手かざししたいと思った」(女・14歳)
「魔法使いサリーになれると思った」(女・14歳)
「黒田みのるのアニメをみて『手かざし』に関心があって」(男・16歳) 等々。
他に、「面白そうだったから」(男・11歳) というのもあった。
〔B〕次は、入信理由が特に無いという人による補足説明である。彼らは、両親に連れられて入っている場合が多い。後で詳しく検討したい点であるが、似たような記述が全部で12例あった。
「母のすすめにより素直に入信」(女・10歳)
「親が入っていたので、何もわからないが」(男・11歳)
「両親が入信しており、私も入信するのが、当然のように思っていました」(女・12歳)
「10才のたん生日におみたまをいただきました」(女・10歳) 等々。
〔C〕病気その他の現世利益も、当世若者風である。
「サッカーでケガをして」(男・15歳)
「高校合格したかった」(女・15歳)
「就職につく際、神様に選んでいただこうと思って」(男・22歳)
「約6年間のうつ病のようなもの(ノイローゼ状態)が、一回のみけんのおきよめでこれで完全によくなると思えるような体験をしたから。そして、何がなんでも研修をうけたいと、そのおきよめの体けんで思いました」(女・17歳、傍点筆者) 等々。
〔D〕近親者の霊も含めた、多種多様な人間関係。
「父親を脳卒中で亡くし正法にて供養したくて」(男・24歳)
「母の供養がしたかった」(女・21歳)
「友人の死亡により、その人を霊的に救いたかったので」(女・20歳)
「知人の健康が気にかかった為」(男・22歳)

「交際している女性に勧められ、彼女のしていることを理解したかった」（男・27歳）
「つきあってた彼の事で親に反対されたので」（女・19歳）
「同級生のいじめからのがれるため。（登校拒否をしていた）」（男・17歳）
「会社の人間関係で悩んでいたため」（女・21歳）
「精神的な悩み（人間関係と仕事のうえでのことで）で、何か1つ真理というものがあるのではないかと考えていました」（男・24歳）等々。
〔E〕変身願望も少なくない。
「“運命が変わる”ということで」（男・22歳）
「自分を変えたかった。ここに入信すれば、本当の自分になれると思ったから」（女・19歳）
「自分の性格を改善したかった」（女・15歳）等々。
〔F〕そして、エコロジー問題。
「添加物などの毒気消除に関心があった」（女・15歳）
「（将来の）自分の子供やダンナ様に害のない食品を食べてもらいたいと思った」（女・21歳）等々。
〔G〕その他、
「本当の神様に会いたかった」（女・23歳）
「救い主様の魅力に引かれた」（男・19歳）
「仕事にいきづまって」（女・28歳）
「自分のこれからなすべき事をさがしたかったから」（男・21歳）
「生命のはかなさに不安を感じた」（男・18歳）
「現在の社会に不安を感じ、生きていく上で信じるものが欲しかった」（女・19歳）
「自分自身の心のやすらぎを感じたから」（男・17歳）
「精神的支えとして、又、お浄めの体験により、生まれてきて味わった事のない、解放感と感動を覚え、強く興味を持った」（男・24歳）
「人のお役に立てそうだったから」（女・19歳）なども、目を引いた。

結局、3地点で百数十人の対象者が入信動機に関して自由記述をしていた。以上はその一部に過ぎないが、これだけをみても、様々な思いや悩み、目的、関心で宗教に入っていることが分かるのである。けっして「霊無病」のカテゴリーだけに収めきれるものではない。そうした若い人生模様の複雑な襞に

分け入った質的研究が望まれるところである。しかし以下では、量的調査の性格上、主たる傾向としての「霊無病」に焦点を絞った考察を進めて行かざるをえない。本研究の限界であると同時に、今後の新宗教研究の一つの指針として、このことを事例の一端を添えて指摘しておきたい。

表6　入信年齢と入信動機の親和関係

	霊界志向	理由なし	病気	家族問題	真光の終末観	仲間を求めて	貧困	その他	不明	合計
10-12歳(小学生層)	22(11.3)	102(52.3)	35(17.9)	14(7.2)	2(1.0)	2(1.0)	0	8(4.1)	10(5.1)	195(100.0)
13-15歳(中学生層)	43(27.7)	40(25.8)	33(21.3)	14(9.0)	6(3.9)	1(0.6)	0	8(5.2)	10(6.5)	155(100.0)
16-18歳(高校生層)	66(32.0)	19(9.2)	49(23.8)	12(5.8)	21(10.2)	3(1.5)	2(1.0)	10(4.9)	24(11.7)	206(100.0)
19-22歳(大学相当層)	58(27.4)	22(10.4)	50(23.6)	8(3.8)	15(7.1)	13(6.1)	0	20(9.4)	26(12.3)	212(100.0)
23歳以上(社会人層)	24(20.7)	20(17.2)	28(24.1)	14(12.1)	7(6.0)	2(1.7)	1(0.9)	8(6.9)	12(10.3)	116(100.0)
不明	0	0	1(11.1)	1(11.1)	1(11.1)	0	0	2(22.2)	4(44.4)	9(100.0)
合計	213(23.9)	203(22.7)	196(21.9)	63(7.1)	52(5.8)	21(2.4)	3(0.3)	56(6.3)	86(9.6)	893(100.0)

(注)関東・関西のみ。

さて、当面の論点は入信動機の年齢層との対応パターンにあった。それは、以上の事例を通覧して受ける印象を客観的に確認する作業となるだろう。表6は、入信年齢別に入信動機の分布状況を表わしている。一見して分かるように、「霊」は高校生層を中心とする青年層と親和関係がある。「真光の終末観」すなわち「神の経綸」思想が、とくに高校生層以上に受けているのも、このことと同根であろう。しかし、霊界志向の年齢的限界はやはりあるのであって、社会人層になるとこれが減少し、とくに「家族問題」が顕著に増加している点が興味深い。霊界志向から一転して現実志向となっている。一方、「無」は、小学生層と強く、中学生層とも若干、親和関係が認められる。こうして、青年層と少年層が、動機の「霊」と「無」において対象的な関係にあることが判明した。そこで急いで「無」の実体を突きとめたいところだが、その前に「病」にも少し触れておけば、「病」はどの年齢層にもほぼ同程度で遍在しているのである。筆者はかつて、創価学会の入信動機の変化を高度成長期を通じて時系列的に追ったことがあり、その結果、「貧」や「争」などは特定の社会階層と親和関係を有し、かつ、高度経済成長過程でその入会率を激減されている一方、「病」だけはどの階層とも結びつき、かつ、時系列的にもほぼ一定の比重(今回と同じ20～30%程度!)を保って推移していることを実証し、新宗教における「病」的入信行為の階層的・時代的遍在性

を仮説的に主張したことがある［谷1980：126－127］。今回の調査は、これを世代面で追証する結果となっている。

表７　入信動機と勧誘者

	家族	友人	勧誘者なし	未知の信者	職場の人	親類の人	近所の人	その他	不明	合計
霊界志向	51(23.9)	52(24.4)	31(14.6)	23(10.8)	17(8.0)	12(5.6)	10(4.7)	16(7.5)	1(0.5)	213(100.0)
理由なし	144(70.9)	24(11.8)	15(7.4)	4(2.0)	7(3.4)	4(2.0)	4(2.0)	1(0.5)	0	203(100.0)
病気	67(34.2)	30(15.3)	22(11.2)	15(7.7)	19(9.7)	16(8.2)	15(7.7)	10(5.1)	2(1.0)	196(100.0)
家族問題	32(50.8)	5(7.9)	8(12.7)	4(6.3)	4(6.3)	3(4.8)	2(3.2)	5(7.9)	0	63(100.0)
真光の終末観	13(25.0)	10(19.2)	13(25.0)	7(13.5)	6(11.5)	1(1.9)	0	2(3.8)	0	52(100.0)
仲間を求めて	4(19.0)	5(23.8)	2(9.5)	2(9.5)	4(19.0)	3(14.3)	0	1(4.8)	0	21(100.0)
貧困	0	1(33.3)	1(33.3)	0	0	0	0	1(33.3)	0	3(100.0)
その他	13(23.2)	5(8.9)	15(26.8)	9(16.1)	2(3.6)	5(8.9)	0	6(10.7)	1(1.8)	56(100.0)
不明	26(30.2)	24(27.9)	11(12.8)	7(8.1)	6(7.0)	3(3.5)	2(2.3)	4(4.7)	3(3.5)	86(100.0)
合計	350(39.2)	156(17.5)	118(13.2)	71(8.0)	65(7.3)	47(5.3)	33(3.7)	46(5.2)	7(0.8)	893(100.0)

（注）関東・関西のみ。

さて、若者たちを教団へ勧誘した者は誰か。表７は、入信動機と勧誘者（質問文では「特に熱心に勧めてくれた人」）のクロス表である。全体に家族の勧誘が４割と最も多い。これに友人（２割弱）と「勧誘者なし」（１割強）が続くが、いずれも家族に大きく水をあけられている。また、「未知の信者」は８％しかいなかった。よく街頭で真光隊員が通行人に手かざしをしながら勧誘している姿を見かけるが、そうした活動が、信者獲得という面ではほとんど効を奏していないことを、この数字は傍証しているわけである（無論、「効果」が街頭布教の最大目的ではないだろう）。

動機との関連でまず注目されることは、入信理由が無い者の70.9％が、家族に誘われて入信しているという事実である。いわば、入信動機における「無」は、家族関係における「有」によって補充されているということである。しかも、表の「理由無し」×「家族」のセルの144人中、８割以上が中学生以下であった（表は略）。彼らは、親の勧めに素直に従って道場についてきた「連れられ型」の入信者ということができる。そこで家族における同信結合の実態が問題となるが、まず、家族に自分以外の信者がいる者は、関東69.4％、関西82.5％（両圏で75.4％）、広島75.0％となっている。単身生活者が比較的多い首都圏で単独信仰の傾向が強く出てくるのは当然としても、

全体に4人に3人は家族とともに信仰をしていることがわかる。実際、平均家族信者数（本人含む）も、関東2.86人、関西3.43人（両圏で3.13人）、広島3.23人である。この数は日本の平均世帯規模3.18人（85年国調）とほぼ一致しており、（核）家族ぐるみの信仰の姿を彷彿とさせるものがある。とりわけ母子結合が非常に強い。図7に家族の同信関係を具体的に示してみたが、家族と同居している者の79.8%が母親も信者だというのである。中でも、勧誘者が「家族」である者の実に86.7%が、母親も信者であると答えていた(表は略)。以上のデータから、連れられ型の中軸関係は、強い母子結合にあると見ることができる。なお、「無」のみならず、「病」など他の動機にも、連れられ型の要素は多少なりとも含まれていることはいうまでもない。たとえば、表7で、「病気」×「家族」のセルの67人の内、6割が中学生以下であった。

では、霊界志向の方にはどのような関係特性があるだろうか。それは、家族の勧誘が「無」と比べて非常に少なく、逆に、「友人」「勧誘者なし」「未知の信者」が大きな比重を占めているということである。3者合わせて49.8%となり、これは「無」の場合の2倍以上の比率である。連れられ型とは明らかに異質といえる。連れられ型でないのは、「霊」的入信者の年齢層が「無」よりも高いことの反映であるが、見方を変えていえば、若者の生活様式が、より個人的、獲得的（→友人)、匿名的（→未知の信者)、孤立的（→勧誘者なし)、総じて都市的、大衆的、私的であることを意味している。図8のように、関東の入信ネットワークが、「友人」「なし」「未知」「職場」も含めて、より獲得的、匿名的であり、関西が家族的、すなわち生得的、共同的であるのも、調査対象範域が、前者が首都中心であり、後者が関西一円にわたっていることによって規定される都市性の濃度の違いといえよう。

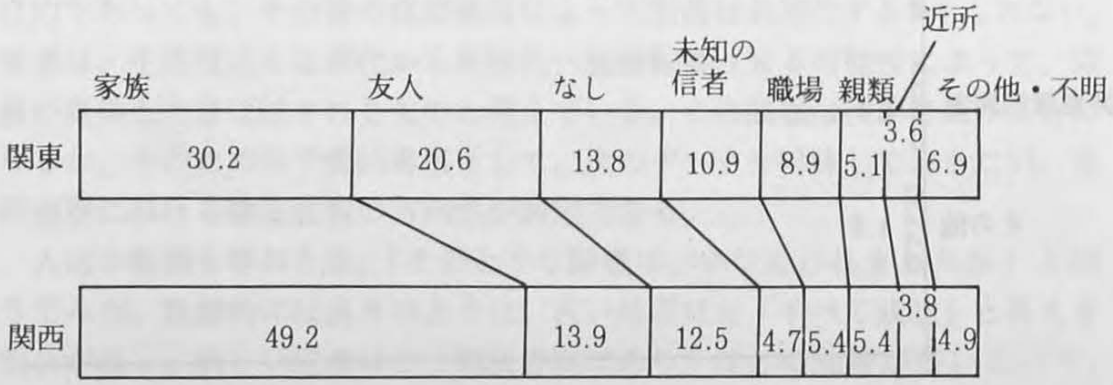

図8　入信勧誘者の比較

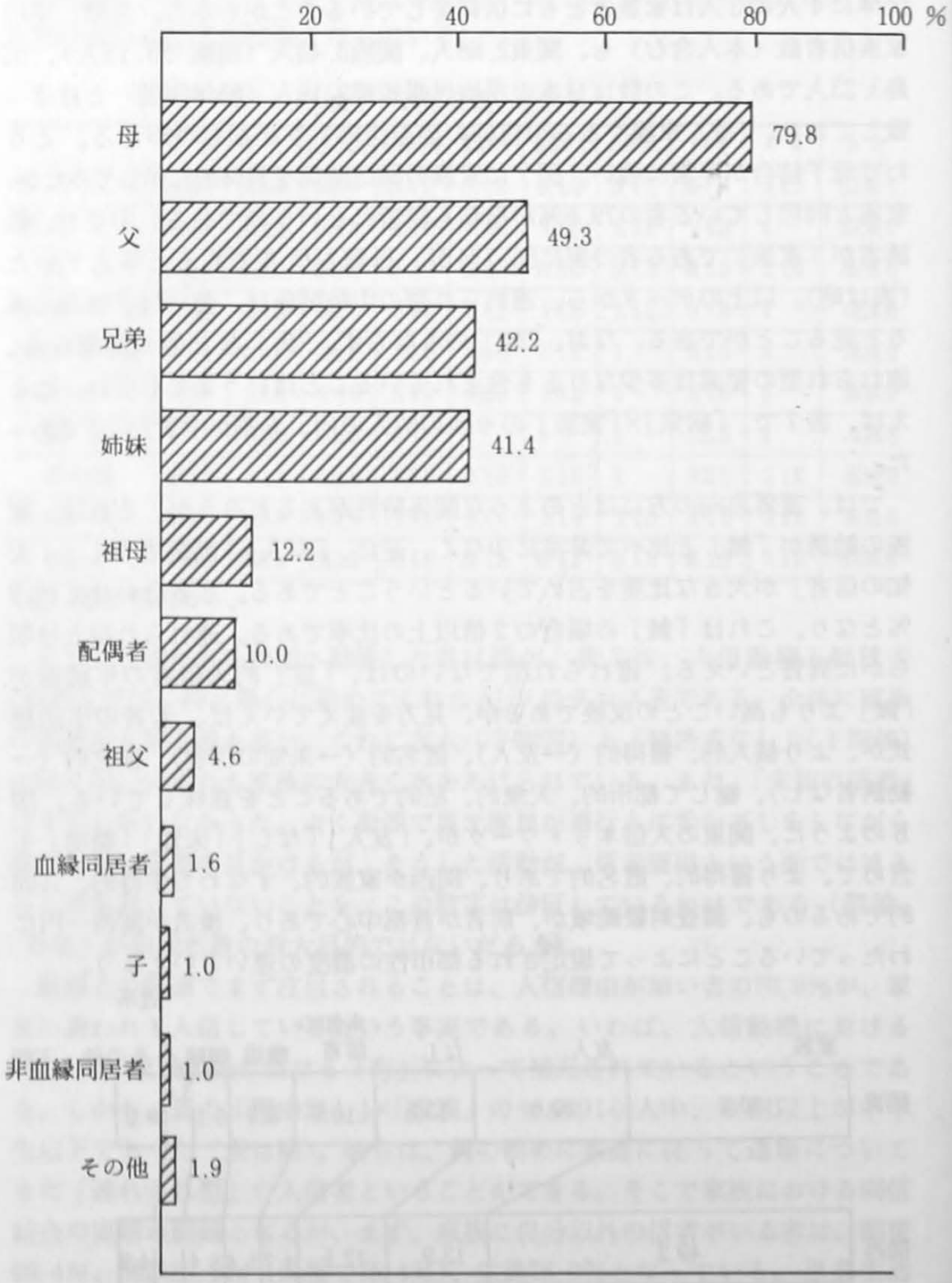

図7　同居家族の同信関係（関東・関西）

ところで、入信行動にみられる都市性は、彼らの生活世界に占めるマスコミ情報の影響力の大きさを示唆していないだろうか。マスコミが宗教ブームを煽るメカニズムであることは第1節で説いたが、とりわけ霊界志向に対して、この宗教ブームが大いに関係していると見ることができるのである（先の事例〔A〕を振り返っていただきたい)。この視点から見るとき、例えば他者の勧誘による入信であっても、彼（彼女）が持っている「御み霊ペンダント」が「依存効果」を発揮している場合のあることに気づくのである。14歳（入信当時）の女の子は、「祖父のおみたまを見て、『私もほしいなぁー』って思ったから」入信したと書いていた。

いずれにせよ、動機とネットワークの両面で連れられ型とは異質な、ブームに乗って入信するタイプがあるということである。そこでこれを、「煽られ型」とよぶことにしたい。煽られ型が東京でより顕著に出現するのも、そこが日本でほぼ唯一最大の「異次元情報」発信基地であることを想えば、至極当然のことであろう。そういえば、先の「サリー」ファンも、「黒田」ファンも、ともに東京の若者であった。煽られ型の本質は、霊界志向にある。

以上の考察によって、この項冒頭で触れた、分裂期における信者急増の「不思議」の一端が理解されよう。すなわち、連れられ型は内部動員の一部であり、煽られ型はブーム的入信そのもので、両者あいまって、教勢の拡大に寄与したということである。無論、青年信者の、教団全体の成長に対する寄与力を過大に評価するつもりはない。ここでは、2類型の共通項として指摘できる生活の私事化の事態に焦点を絞った議論をしてみたい。すなわち作業仮説的には、母子結合も霊界志向も、家族における不統合な夫婦結合や父親の無存在性など、家族関係の解体的状況が要因あるいは遠因の一つではないかと考えることが、ひとまず可能であろう。だが、たとえ入信段階では孤立的であっても、その後の信仰過程によって生活は共同化するかもしれない。筆者は、生活様式を私事化から共同化へ価値転換させる可能性によって、宗教の真偽と力量は試されるものと考えている。この問題は次節で扱うことになるが、そのための予備的考察として、次のデータを吟味しておきたい。信仰過程における態度変容の方向性が展望できる。

入信の動機を尋ねた後、「そのような動機は、かなえられましたか」と問うてみた。数量的には表8のように、古い信者ほど「すべて成就」と答える割合が高く、新しい信者ほど「解決方向にあり」などの回答が多いという、予想どおりの結果であった。功利的な見方をすれば、成就した者のみが教団

を離脱せずに留まっているという解釈もできるし、実際そういう出入りが非常に多いに違いない。しかし、成就グループが準拠集団として眼前に存在しているからこそ、それを目標とする新入信者のモラール（信仰心や組織忠誠）も高まり、「解決方向にあり」「解決を信じている」などという答えが返ってくる、そういう一面も見落とすことはできないだろう。「さして期待もしていない」「失望した」という回答が、新入グループでもほぼ皆無なのは、ある意味で、そうした信者関係の結果とみることもできるのである。

表8　入信動機の成就

入信時期→	−1973	74−77	78−82	83−87	不明	合計
入信の動機だったことは、すべて叶えられた	10 (52.6)	53 (48.6)	116 (47.2)	88 (35.5)	0	267 (42.7)
まだ叶えられていないが、解決の方向に向かっている	0	26 (23.9)	59 (24.0)	77 (31.0)	0	162 (25.9)
まだ叶えられていないが、やがて解決すると信じている	3 (15.8)	15 (13.8)	38 (15.4)	47 (19.0)	2 (66.7)	105 (16.8)
とりたてて御利益はないが、心の安定を得た	0	1 (0.9)	9 (3.7)	18 (7.3)	0	28 (4.5)
叶えられないが、さして期待もしていない	0	0	0	3 (1.2)	1 (33.3)	4 (0.6)
叶えられず、失望した	0	2 (1.8)	0	0	0	2 (0.3)
その他	5 (26.3)	12 (11.0)	21 (8.5)	11 (4.4)	0	49 (7.8)
不　明	1 (5.3)	0	3 (1.2)	4 (1.6)	0	8 (1.3)
合　計	19 (100%)	109 (100%)	246 (100%)	248 (100%)	3 (100%)	625 (100%)

（注1）関東・関西のみ。
（注2）「動機なし」など非該当者を除外している。

それにしても、このような質問形式は、信者としての現在の境位を正しく測定するためにはあまりに一面的な見方といわざるをえない。調査対象者は、

質問に対して一応は回答してくれているけれども、彼らの意識のもう少し深いところは現れていないように思われるのである。その点、本問（動機成就）の自由回答がそのような深層を窺わせていて貴重な資料となっている。自由回答は、「その他」の項目に関して具体的に記述してもらったもので、全部で60余りの回答があった。その中には、確かにこちらが用意したカテゴリー（霊病無）にすっぽり収まる反応も、多少はあった。たとえば、「病」的入信者では「手術せずにすみました」（女・27歳——調査時、以下も同）。「霊」的入信者では、「特に望むことを実現させる為に入信したわけではありません」（男・34歳）。また、「無」的入信者では「特に理由がなかったのでわかりません」（女・17歳）といった類である。けれども、大部分は入信後の態度変容に関するものであり、のみならず、「霊無病」の枠で信者を把捉したつもりの調査主体の視野の狭さをはっきりと批判するものもあった。

〔ア〕まず、「ハンド・パワーが簡単にできる」からといって入信した若者が、

「研修中に目的意識が変わった」（男・21歳）

という。あまり知られていないことであるが、初級研修で、入信志願者は「霊術」に囚われすぎることを厳しく戒められるのである。筆者が受けた初級研修でも、講師は、「霊に興味を持っては絶対にいけない。霊媒に陥ったら狂い死にすると思え」と、第1日目に、声を大にして警告していた。皮相的な「霊術」的関心から脱皮しなくてはならないというわけである。脱皮して行く先が、神の在す所であることはいうまでもない。同じ煽られ型が、

「神様の実在を少しずつ感じることができるようになった」（女・26歳）

「入信前に考えてもいなかった奥深いすばらしいことを知る事、また身に付けることができた」（女・24歳）

と、信仰の内面的深化について語っている。

〔イ〕また、病気など現世利益が目的の入信者も、

「とらえ方が変わったので（治らなくても——筆者注、以下も同）気にしない」（女・33歳）

「（病気は）きっかけであって、御利益信仰ではない」（男・24歳）

「一部の望みはかなえられなかったが、その事に対する大半の執着は取れた」（男・26歳）

「御利益は、自分から求めていては、なかなかいただけなく、求めないようになると、いろいろありました」（男・19歳）

ともいっている。研修では、「想念転換」ということが指導される。筆者がオブザーバーとして参加した中級研修で、講師は、「ある耳の不自由な信者の道場奉仕の想念が、耳が聞こえるようになりますようにで道場掃除をする想念から、みんなが気持ちよく使えますようにという想念に変わったとき、耳も聞こえるようになった」という「体験談」を使って、信仰の共同化への方向づけを指導していた。真光による治病は、実践活動の「行きがけの駄賃」だ、とも言った。自己愛から「利他愛」への「想念転換」が期待されている。つまり、信者たちは、〔ア〕の信仰の深化が、〔イ〕の信仰の社会化とパラレルに進行することによって、宗教的人間（真光教団では「種人」か）の完成に近づくと教えられるのである。

〔ウ〕だから、次のようなコメントがくるのも道理である。

「この質問は、研修を聞き、実践をした人には何とも答えられない質問です」（女・18歳）

「大変失礼ですが、崇教真光はそういう次元の質問には答えられません。利益的な事になりますと、非常に低次元になってしまいますし、又、答えることじたい神様に申し訳ないと私は、思っています」（男・26歳）

「かなえられる、られないの問題は全く考えたことはありません」（女・20歳）という人も少なくなかった。

〔エ〕最後に、連れられ型の入信者の態度変容を見ると、

「親に強制的にすすめられて入ったが、現在では非常に感謝させて頂いている」（男・29歳）

「特に理由なくおみ霊を頂きましたが、今では心の安定を得たと思っています」（女・25歳）

「（入信の）理由はなかったが、自分が良い方に変わってきた」（女・18歳）

「人生がかわった。自分の性格もかわった」（女・28歳）

「人生の指針を見出し魂の修養に勤められて満足」（男・28歳）

「強い動機をもって入信したのではありませんが神様の実在をはっきり知ることができました」（女・17歳）

また、「友達がふえたし、道場が安心できる場となっている」（女・18歳）という回答もあった。

以上の事例は、われわれに、信仰に至る登山口は複数あっても、収斂する頂上は一つだということを教えている。煽られ型も連れられ型も、入信後は

ともに学習と実践を通して教団の信念体系を内面化し、「種人」と成っていく（ことが期待されている）と、仮定できる。そこで次に、この仮説を検証してみたい。

表9　道場に行く頻度

	毎日	週3・4回	週1回	月1・2回	年1・2回	不明	合計
霊界志向	103(48.4)	83(39.0)	23(10.8)	4(1.9)	0	0	213(100.0)
理由無し	76(37.4)	77(37.9)	34(16.7)	12(5.9)	2(1.0)	2(1.0)	203(100.0)
病気	79(40.3)	79(40.3)	32(16.3)	5(2.6)	1(0.5)	0	196(100.0)
家族問題	25(39.7)	27(42.9)	8(12.7)	1(1.6)	2(3.2)	0	63(100.0)
真光の終末観	27(51.9)	22(42.3)	3(5.8)	0	0	0	52(100.0)
仲間を求めて	8(38.1)	12(57.1)	1(4.8)	0	0	0	21(100.0)
貧困	2(66.7)	0	0	1(33.3)	0	0	3(100.0)
その他	28(50.0)	18(32.1)	9(16.1)	1(1.8)	0	0	56(100.0)
不明	43(50.0)	23(26.7)	19(22.1)	1(1.2)	0	0	86(100.0)
合計	391(43.8)	341(38.2)	129(14.4)	25(2.8)	5(0.6)	2(0.2)	893(100.0)

（注）関東・関西全サンプル。

表10　『御聖言』の読書度

	完読	大体読んだ	半分くらい	少し読んだ	殆ど読まず	不明	合計
霊界志向	91(42.7)	57(26.8)	33(15.5)	23(10.8)	8(3.8)	1(0.5)	213(100.0)
理由無し	55(27.1)	33(16.3)	37(18.2)	51(25.1)	26(12.8)	1(0.5)	203(100.0)
病気	58(29.6)	51(26.0)	37(18.9)	34(17.3)	16(8.2)	0	196(100.0)
家族問題	12(19.0)	17(27.0)	12(19.0)	15(23.8)	7(11.1)	0	63(100.0)
真光の終末観	28(53.8)	11(21.2)	7(13.5)	4(7.7)	2(3.8)	0	52(100.0)
仲間を求めて	6(28.6)	6(28.6)	6(28.6)	2(9.5)	0	1(4.8)	21(100.0)
貧困	2(66.7)	0	1(33.3)	0	0	0	3(100.0)
その他	23(41.1)	12(21.4)	9(16.1)	10(17.9)	2(3.6)	0	56(100.0)
不明	42(48.8)	16(18.6)	11(12.8)	12(14.0)	5(5.8)	0	86(100.0)
合計	317(35.5)	203(22.7)	153(17.1)	151(16.9)	66(7.4)	3(0.3)	893(100.0)

（注）関東・関西全サンプル。

すなわち、宗教上の各種活動や学習の頻度、高低、深浅などを、入信類型を基軸にして比較するわけである。ただし、年齢条件をコントロールして、20歳以上のサンプルを用いて考察を進めたいと思う。試みに、表9・10を参

照されたい。両表は、関東・関西の全サンプルを用いたクロス集計であるが、明らかに煽られ型（指標は「霊界志向」）の方が、連れられ型（同じく「理由無し」）よりも熱心に信仰しているように見える。しかも、全11問のどの宗教行動についても、だいたい同様のパターンが認められるのである（表は略）。したがって、これだけを見て判断しようとすると、連れられ型はこれといった理由や目的もないままに入信したのであまり熱心でない一方、煽られ型はそれなりの目的意識を持って入信したのでモラールも高い、といった結論に至りかねない。しかし、両類型間のこの差は、入信動機よりもむしろ、年齢層の違いに主として起因していると解釈すべきである。なぜならば、「霊」的入信者と「無」的入信者の間の大きな年齢差は、表11のように、入信時のみならず、現在でも歴然とあり、前者に10代は14.6%しかいないのが、後者には42.4%も含まれているからである。未成年者の宗教生活が、実践面で物理的にも時間的にも制約があり（表9の道場活動など）、また、学習面でも能力的に限界がある（表10の教典学習など）ことは明らかであろう。20歳未満の真光隊員は役職者になれないという「隊規」が、その端的なあらわれである。

表11　入信動機別現在年齢

	10代	20代	30代	不　明	合　計
霊界志向	31(14.6)	153(71.8)	29(13.6)	0	213(100.0)
理由無し	86(42.4)	104(51.2)	13(6.4)	0	203(100.0)
病　気	44(22.4)	135(68.9)	17(8.7)	0	196(100.0)
家族問題	15(23.8)	41(65.1)	7(11.1)	0	63(100.0)
真光の終末観	8(15.4)	37(71.2)	6(11.5)	1(1.9)	52(100.0)
仲間を求めて	1(4.8)	18(85.7)	2(9.5)	0	21(100.0)
貧　困	0	1(33.3)	2(66.7)	0	3(100.0)
その他	14(25.0)	32(57.1)	8(14.3)	2(3.6)	56(100.0)
不　明	14(16.3)	60(69.8)	11(12.8)	1(1.2)	86(100.0)
合　計	213(23.9)	581(65.1)	95(10.6)	4(0.4)	893(100.0)

（注）関東・関西のみ。

そこで、前表9・10を、20歳以上の対象者に限って集計し直した結果が表12・13である。「霊」と「無」の間のあれほど大きかった信仰差が、ほとん

表12　道場に通う頻度

	毎　日	週3・4回	週1回	月1・2回	年1・2回	不　明	合　計
霊界志向	89(48.9)	73(40.1)	16(8.8)	4(2.2)	0	0	182(100.0)
理由無し	54(46.2)	48(41.0)	12(10.3)	1(0.9)	0	2(1.7)	117(100.0)
病　気	65(42.8)	63(41.4)	20(13.2)	3(2.0)	1(0.7)	0	152(100.0)
家族問題	21(43.8)	22(45.8)	2(4.2)	1(2.1)	2(4.2)	0	48(100.0)
真光の終末観	23(52.3)	19(43.2)	2(4.5)	0	0	0	44(100.0)
仲間を求めて	8(40.0)	11(55.0)	1(5.0)	0	0	0	20(100.0)
貧　困	2(66.7)	0	0	1(33.3)	0	0	3(100.0)
その他	19(47.5)	14(35.0)	6(15.0)	1(2.5)	0	0	40(100.0)
不　明	38(53.5)	18(25.4)	14(19.7)	1(1.4)	0	0	71(100.0)
合　計	319(47.1)	268(39.6)	73(10.8)	12(1.8)	3(0.4)	2(0.3)	677(100.0)

(注) 関東・関西の20歳以上。

表13　『御聖言』の読書度

	完　読	大体読んだ	半分くらい	少し読んだ	殆ど読まず	不　明	合　計
霊界志向	84(46.2)	49(26.9)	30(16.5)	14(7.7)	5(2.7)	0	182(100.0)
理由無し	47(40.2)	26(22.2)	19(16.2)	19(16.2)	6(5.1)	0	117(100.0)
病　気	56(36.8)	41(27.0)	27(17.8)	21(13.8)	7(4.6)	0	152(100.0)
家族問題	12(25.0)	15(31.3)	9(18.8)	6(12.5)	6(12.5)	0	48(100.0)
真光の終末観	28(63.6)	10(22.7)	5(11.4)	1(2.3)	0	0	44(100.0)
仲間を求めて	6(30.0)	5(25.0)	6(30.0)	2(10.0)	0	1(5.0)	20(100.0)
貧　困	2(66.7)	0	1(33.3)	0	0	0	3(100.0)
その他	18(45.0)	10(25.0)	7(17.5)	5(12.5)	0	0	40(100.0)
不　明	38(53.5)	15(21.1)	7(9.9)	7(9.9)	4(5.6)	0	71(100.0)
合　計	291(43.0)	171(25.3)	111(16.4)	75(11.1)	28(4.1)	1(0.1)	677(100.0)

(注) 関東・関西の20歳以上。

ど消えてしまっている。とくに表12「道場へ行く頻度」では、まったく差が見られない[22]。要するに、成人（青年）信者の場合、煽られ型も連れられ型も、いずれもほぼ同程度に熱心に信仰しており、つまり高水準で平準化しているといえるのである。三大入信理由（「理由無し」も含めて）のうちでは、「病」の信仰度が若干見劣りするものの、やはり傾向としては平準化を指向している。しかも、こうした「霊無病」の平準化傾向は、宗教行動に関

する他のすべての質問項目にもほぼ共通してみられる現象なのである。論点を明確にするために、以下では「霊無病」（これだけで、全対象者の68.5%、20歳以上では66.6%）以外の動機は残余カテゴリーとして括ってデータを示すことにするが、表14～16の学習面[23]、表17・18の行事参加[24]、表19～21の隊活動、そして煽られ型入信者にとって最大のチャーム・ポイントであった「霊動体験」（表22）においてすら、とりわけ「霊」と「無」の間に有為差はほとんど認められないのである。無論このような高いレベルへの収斂が、信仰過程における態度変容の結果であることは言うまでもない。図9～11に示した信仰期間と各種信仰度との正の相関関係（1、2例外はあるが）が、このことを証明している。

表14　研修会の受講クラス

	上級	中級	初級	不明	合計
霊界志向	5(2.7)	81(44.5)	83(45.6)	13(7.1)	182(100.0)
理由無し	2(1.7)	44(37.6)	62(53.0)	9(7.7)	117(100.0)
病気	3(2.0)	47(30.9)	89(58.6)	13(8.6)	152(100.0)
その他	9(4.0)	88(38.9)	111(49.1)	18(8.0)	226(100.0)
合計	19(3.0)	260(41.4)	345(54.9)	53(7.8)	677(100.0)

（注）関東・関西の20歳以上。

表15　『祈言集』の読書度

	完読	大体読んだ	半分くらい	少し読んだ	殆ど読まず	不明	合計
霊界志向	72(39.6)	67(36.8)	29(15.9)	10(5.5)	4(2.2)	0	182(100.0)
理由無し	39(33.3)	40(34.2)	25(21.4)	11(9.4)	2(1.7)	0	117(100.0)
病気	41(27.0)	63(41.4)	28(18.4)	14(9.2)	6(3.9)	0	152(100.0)
その他	79(35.0)	91(40.3)	30(13.3)	24(10.6)	2(0.9)	0	226(100.0)
合計	231(34.1)	261(38.6)	112(16.5)	59(8.7)	14(2.1)	0	677(100.0)

（注）関東・関西の20歳以上。

表16　『真光』誌の定期講読

	している	していない	不明	合計
霊界志向	158(86.8)	24(13.2)	0	182(100.0)
理由無し	101(86.3)	16(13.7)	0	117(100.0)
病気	122(80.3)	30(19.7)	0	152(100.0)
その他	197(87.2)	29(12.8)	0	226(100.0)
合計	578(85.4)	99(14.6)	0	677(100.0)

（注）関東・関西の20歳以上。

表17　月並祭への参加度

	よく出席	普　通	あまり出席せず	不　明	合　計
霊界志向	140(76.9)	25(13.7)	17(9.3)	0	182(100.0)
理由無し	89(76.1)	19(16.2)	8(6.8)	1(0.9)	117(100.0)
病　気	115(75.7)	20(13.2)	17(11.2)	0	152(100.0)
その他	186(82.3)	23(10.2)	17(7.5)	0	226(100.0)
合　計	530(78.3)	87(12.9)	59(8.7)	1(0.1)	677(100.0)

(注) 関東・関西の20歳以上。

表18　登山回数

	0～2回	3～6回	7～10回	11～20回	20回以上	不　明	合　計
霊界志向	8(4.4)	23(12.6)	44(24.2)	71(39.0)	33(18.1)	3(1.6)	182(100.0)
理由無し	2(1.7)	22(18.8)	32(27.4)	41(35.0)	18(15.4)	2(1.7)	117(100.0)
病　気	13(8.6)	30(19.7)	36(23.7)	45(29.6)	27(17.8)	1(0.7)	152(100.0)
その他	13(5.8)	34(15.0)	45(19.9)	74(32.7)	53(23.5)	7(3.1)	226(100.0)
合　計	36(5.3)	109(16.1)	157(23.2)	231(34.1)	131(19.4)	13(1.9)	677(100.0)

(注) 関東・関西の20歳以上。

表19　役　職

	方面リーダー	道場リーダー	分教以下のリーダー	役職なし	不　明	合　計
霊界志向	11(6.0)	53(29.1)	44(24.2)	74(40.7)	0	182(100.0)
理由無し	5(4.3)	38(32.5)	34(29.1)	39(33.3)	1(0.9)	117(100.0)
病　気	5(3.3)	36(23.7)	45(29.6)	62(40.8)	4(2.6)	152(100.0)
その他	17(7.5)	58(25.7)	79(35.0)	67(29.6)	5(2.2)	226(100.0)
合　計	38(5.6)	185(27.3)	202(29.8)	242(35.7)	10(1.5)	677(100.0)

(注) 関東・関西の20歳以上。

表20　「修練」への参加度

	よく参加	普　通	あまり参加せず	不　明	合　計
霊界志向	108(59.3)	47(25.8)	26(14.3)	1(0.6)	182(100.0)
理由無し	71(66.7)	34(29.1)	9(7.7)	3(2.6)	117(100.0)
病　気	78(51.3)	44(28.9)	28(18.4)	1(0.7)	152(100.0)
その他	133(58.8)	63(27.9)	23(10.2)	7(3.1)	226(100.0)
合　計	390(57.6)	188(27.8)	86(12.7)	13(1.9)	677(100.0)

(注) 関東・関西の20歳以上。

表21　未信者宅への訪問布教

	よくする方	普　通	あまりせず	不　明	合　計
霊界志向	25(13.7)	99(54.4)	57(31.3)	1(0.6)	182(100.0)
理由無し	15(12.8)	60(51.3)	42(35.9)	0	117(100.0)
病　気	16(10.5)	78(51.3)	58(38.2)	0	152(100.0)
その他	37(16.4)	117(51.8)	70(31.0)	2(0.9)	226(100.0)
合　計	93(13.7)	354(52.3)	227(33.5)	3(0.4)	677(100.0)

(注) 関東・関西の20歳以上。

表22　霊動体験

	頻繁にあり	時々あり	あまりない	一度もない	不　明	合　計
霊界志向	33(18.1)	98(53.8)	41(22.5)	10(5.5)	0	182(100.0)
理由無し	25(21.4)	47(40.2)	35(29.9)	10(8.5)	0	117(100.0)
病　気	30(19.7)	77(50.7)	27(17.8)	18(11.8)	0	152(100.0)
その他	55(24.3)	92(40.7)	56(24.8)	21(9.3)	2(0.9)	226(100.0)
合　計	143(21.1)	314(46.4)	159(23.5)	59(8.7)	2(0.3)	677(100.0)

(注) 関東・関西の20歳以上。

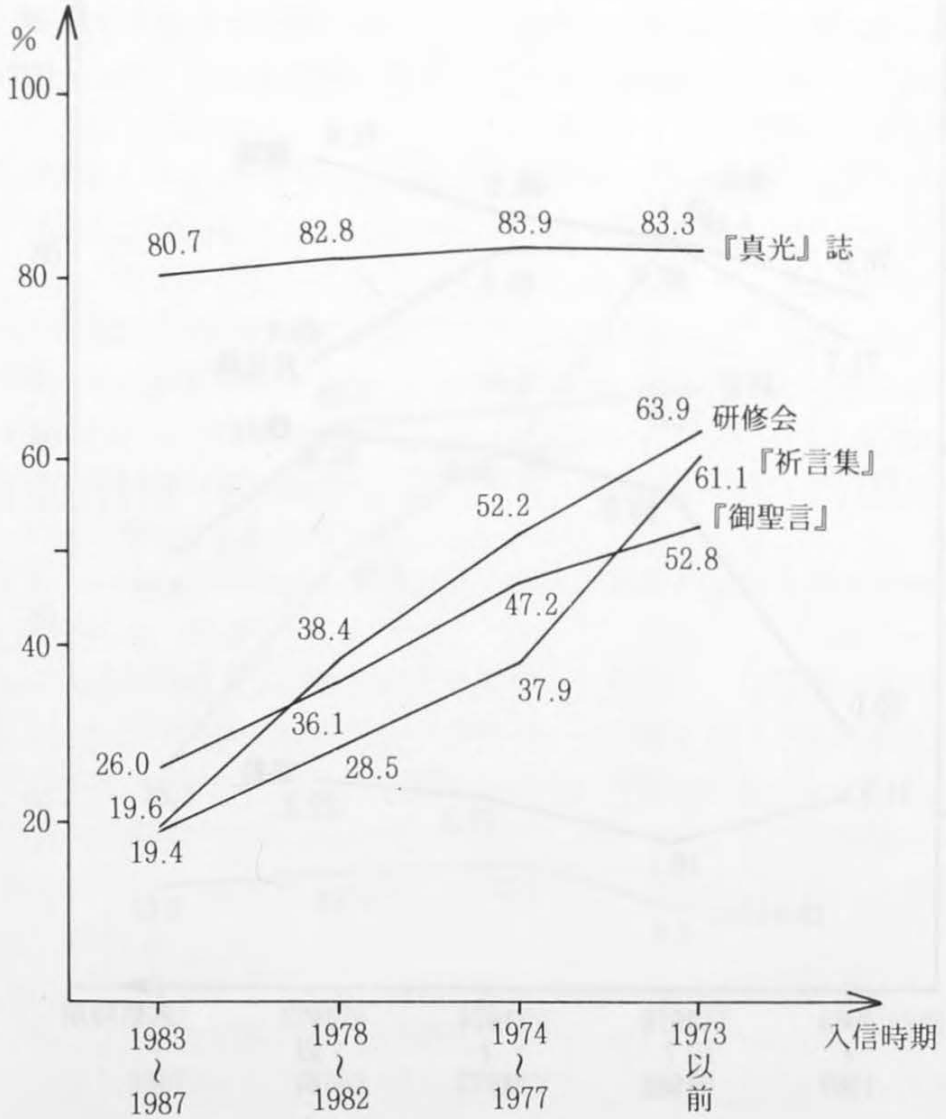

図9　学習面での信仰度と信仰期間の関係
（注1）関東・関西の全サンプル（図10・11も同じ）。
（注2）『真光』誌は定期講読者，研修会は中級以上受講者，『祈言集』と『御聖言』は完読者の割合。

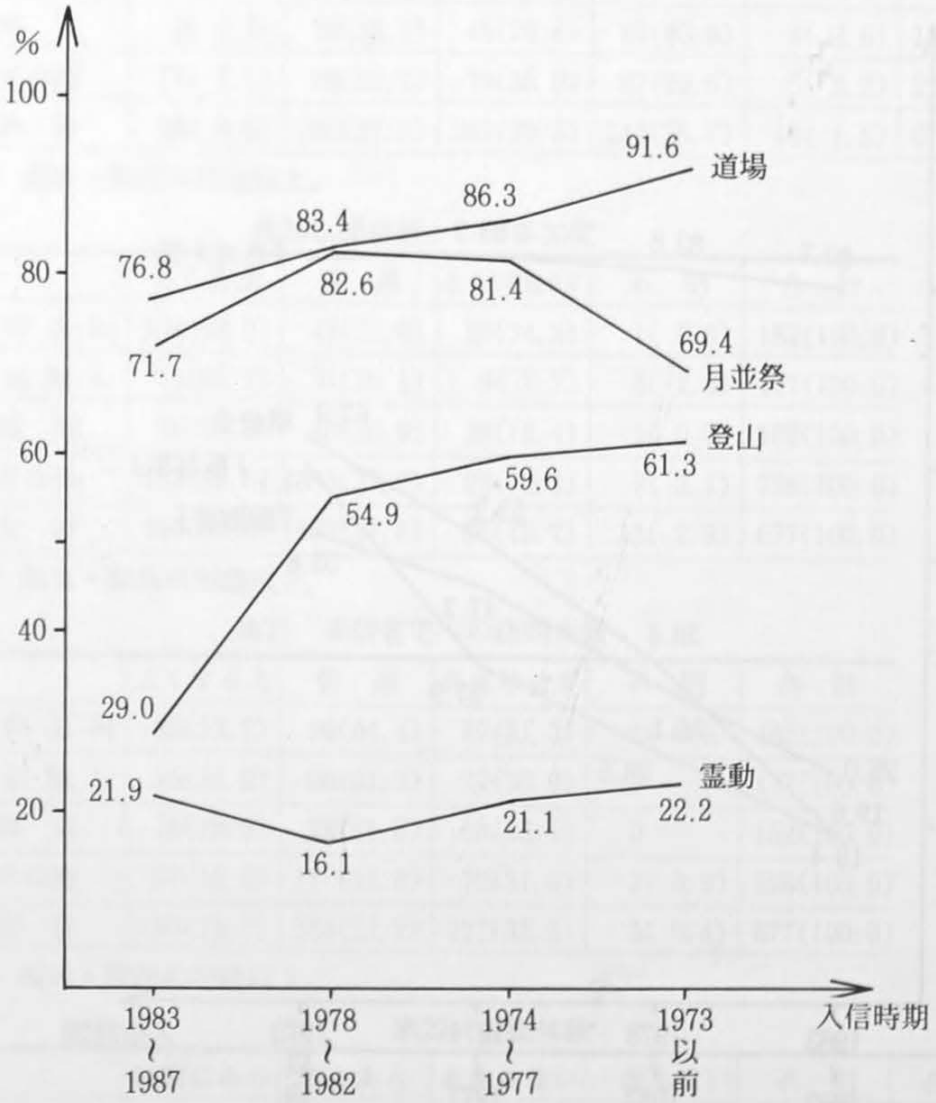

図10　実践面での信仰度と信仰期間の関係
（注）「道場」は「週３・４回以上」道場へ通う人、「月並祭」は、「よく出席」する人、「登山」は「11回以上」の経験者、「霊動」は「ひんぱんにある」人の割合。

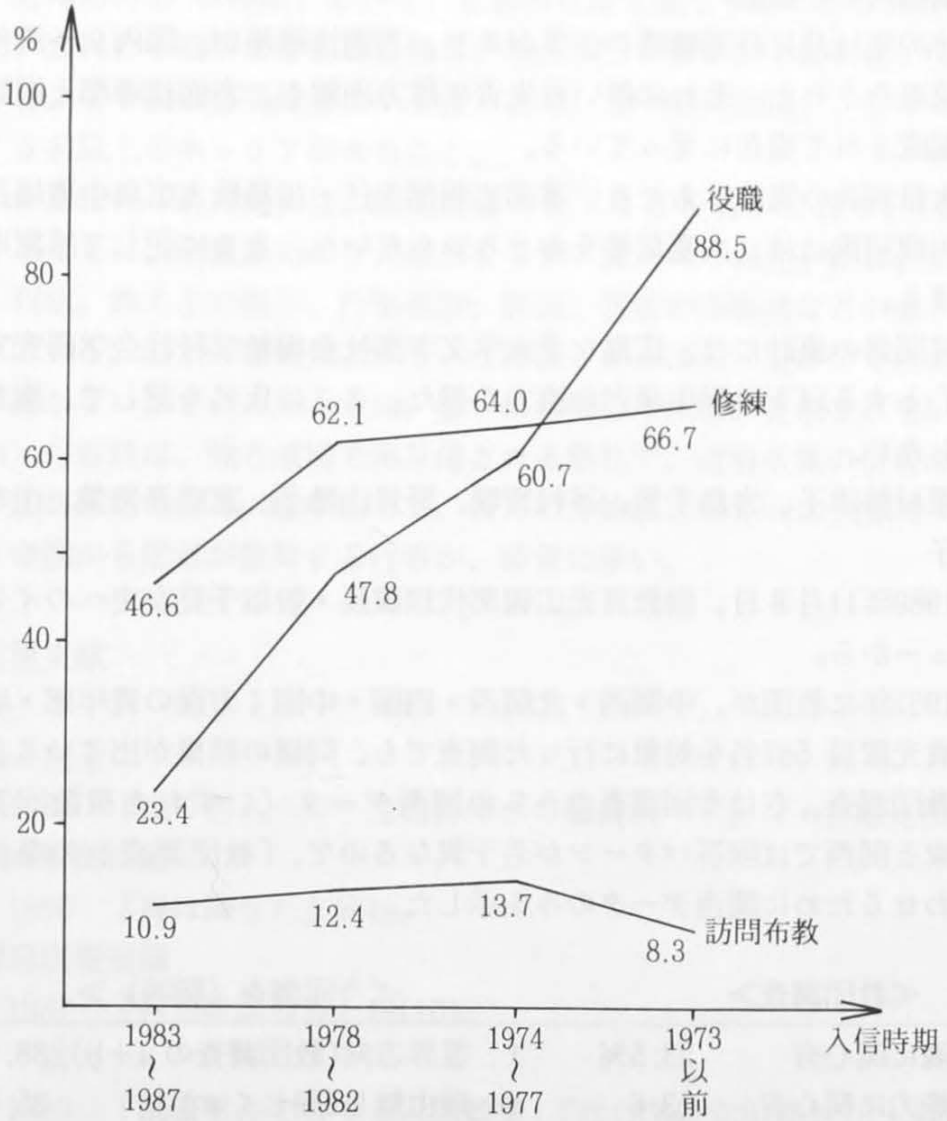

図11　隊活動面での信仰度と信仰期間の関係
(注)「役職」は「道場リーダー」以上、「修練」と「訪問布教」は「よく参加」する者の割合。

注

(15) 神谷氏より聴取。

(16) 福島氏より聴取。

(17) 1989年11月に教団機構の改革があり、方面指導部が、国内9、海外6に統廃合された。それに伴い真光青年隊方面隊も、方面指導部と同数に再編成されて現在に至っている。

(18) 大量調査の実施にあたり、本部広報部主任・福島氏と広島中道場長・宮川龍司氏には、大変な労をおとりいただいた。とくに記して感謝申し上げる。

(19) 質問票の集計には、広島女子大学文学部社会福祉学科社会学研究室を中心とする以下の学生諸君の協力を得た。ここに氏名を記して、謝意を表したい。

粟村勢津子、岩島千里、谷村智咲、野見山勢子、宮崎嘉寿美、山本宙子

(20) 1989年11月8日、崇教真光広報部代理課長・曽根千晃女史へのインタビューから。

(21) 1982年に教団が、中関西・北関西・四国・中国4方面の青年部・成人部真光隊員 587名を対象に行った調査でも、同様の結果が出ている。左が教団調査、右は今回調査のうちの関西データ（いずれも複数回答）。関東と関西では回答パターンが若干異なるので、「教団調査」の条件に合わせるために関西データのみを示した。

≪教団調査≫		≪今回調査（関西）≫	
a．霊魂に関心有	23.5%	ア．霊界志向(教団調査のa＋b)	38.3%
b．超能力に関心有	13.6	イ．理由無し(同じくc)	35.0
c．強い動機なし	31.5	ウ．病気（d）	35.7
（熱心に勧められて）		エ．家族問題（f）	15.6
d．健を求めて	26.7	オ．真光の終末観	10.9
e．神を求めて	18.9	カ．仲間を求めて	4.5
f．和を求めて	9.7	キ．貧困（g）	1.7
g．富を求めて	3.1	ク．その他	8.7
h．その他	17.0		

(22) 崇教真光における道場は、あらゆる宗教活動の拠点として、信者は、とくに用事がなくても、1日に1回は道場に来て手かざしや奉仕などをするようにと指導されている。また、表13の『御聖言』は、光玉が受けた神の啓示（「神示」という）を集めた真光教団で最も重要な教典。

(23) 表14の中級研修の受講資格は、前注(7)を参照。上級研修の受講資格は、①中級研修受講後1年を経た者で、②中級再聴講と、③「お導き」5名以上のキャリアがあること。

表15の『祈言集』は、教団祭儀の祈言（のりごと）などを書いた経本。『御聖言』とともに、崇教真光の2大教典をなす。表16の『真光』誌は、教団の月刊誌。教え主の教示、行事報告、評論、信者の体験談などが盛り込まれている。以上の書物はどれも「ご神書」とよばれ「足のつく所には直接置かない」といったふうに、扱いには細心の注意が要求されている。

(24) 月並祭は、地方道場で毎月催される祭礼で、道場所属の信者の全員参加が原則である。総本山でも、毎月の月始祭と年3回の大祭をはじめ、全国から信者が参集する行事が、非常に多い。

引用文献

岡田　光玉
1983　『光の若人へ——真光青年への御教示——』L・H陽光出版。
神奈川新聞社編
1986　『神は降りた』同社。
総理府広報室編
1987　『月刊世論調査』19(10)。
谷　富夫
1980　「創価学会をめぐる人間類型」『社会学研究年報』10・11：121－133。
1987　「神秘から宗教へ——真光に集う若者たちの世界——」畑中幸子編『現代のこころ——崇教真光——』旺文社, pp.107－116。
真光青年隊統監部
1983　『真光青年隊使命と信条』(非売品)。

〔付記〕本稿の基礎となったデータは、国立民族学博物館特別研究「現代日本における伝統と変容」の助成を受けて実施された共同研究（代表者・畑中幸子中部大学教授）によって得られた。なお、本稿の第1節は、社会分析学会編『社会分析』20号（1992年）に発表した。また、第4・5節は南山大学紀要『アカデミア』（別冊，1993年）に掲載予定である。